

一 出逢い

コーチ生活というのは実に苦しい。ほとんど毎日が苦痛の連続である。勝利の瞬間の喜びはその苦痛を拭い去ってくれるけれどもそれが毎年あるとは限らない。また、一生懸命やっていたら神様が順繰りに勝利を恵んでくれるものでもない。それでも多くのコーチたちが今日も汗まみれになって選手とコートで闘うのはなぜなのか。私は、そのほとんどの人が出逢いのすばらしさを期待するからなのだと思う。

「今年かぎりはやめよう」自分の指導力に自信をなくしてそう思った事が私は何度もある。そんな時私の頭をかすめるのはあの選手この選手、あの人の人の顔である。そうしているいるな出来事を思い出していると決まって、「よし、もう一度がんばろう」と思うのである。

私の出逢いの中で語らなければならない人物が三人いる。

まず最初に登場させなければならぬのが川崎周之先生である。

川崎先生を私が最初に知ったのは私が高校二年生の時の高校生強化練習会であった。

「君、何年生？」

「二年生です」

「ほう、老けてるね」

これが川崎先生と私の最初の会話である。

次に川崎先生が私に関わったのは私が大学二年生の時だった。その頃私は母校である長崎西高校のコーチをしていた。ある日ゾーンオフエンスの練習をしていると、私のコーチぶりを視察に来ていた川崎先生がつかつかとコートの中に入ってきた。そして、「だめだよ、そのパスのやり方では。こうするんだよ」と言っってワイシャツを腕まくりし、選手に教え始めた。

「なんだこの人は？」と思った。コーチである私を無視した一方的な態度に私はムツとしたけど黙っていた。長崎のバスケット界の偉い人だと知っていたからである。しかし、その頃はまだ川崎先生の事については、ただ偉い人という以外の詳しいことは知らなかった。

私は大学三年生の時に長崎県バスケットボール協会の理事になった。協会の仕事をやり始めてようやく川崎先生の像がはっきりしてきた。川崎先生は長崎県バスケットボール協会の創始者であった。若い頃に協会を設立し、以来協会の運営とバスケットの普及発展に尽力して来た人だった。と言えはそれきりだが、川崎先生が何より偉いのは末端の者の事までよく知っているという事だった。

具体的に言つと、中学生や高校生のバスケット選手については、どこの誰は成績がどれくらいで、進路の希望はこうで、親と希望が食い違っていて悩んでいるなどと細かな事をよく知っているのである。そして、自分のことでももないのに親身になって学習の指導や進路の世話をするのである。

当時、山里中学校の校長であったが、バスケットの選手だけでなく自分の学校の生徒の事もバスケットの選手と同じように詳しくかった。当時の生徒はほとんどが校長室に出入りし、直接校長と話をしてるのである。山里中学校の校長が本業だから本当は、自分の学校の生徒と同じようにバスケットの選手の事も…と言わなければならないのだろうが、校長先生というよりもバスケットの先生というイメージの方が強かったからどうしてもこういいう言い方になってしまつ。

高校一年生の終わりからバスケットを始めた私は川崎先生を知るのが遅れたが、大学三年生になって協会の仕事をしようになつてから私も川崎先生のリーダー網の中に入っている事を知った。それからありとあらゆる事を教えてもらった。

ただ、強引で辛辣なところがあるから若い者がそれでしつぽを巻いて逃げてしまふという事はよくある。私も例外ではなくその洗礼を受けた。しかし私は、川崎先生の辛辣さに負けなかった。私だって一生懸命やってるからそれを否定されるような事を言われると腹が立つ。腹が立って、「二度とあの家には出入りしないぞ」と思った事は一度や二度ではない。それは他の若者と同じだ。しかし、しばらくするとまた出入りし始めるのである。

それは、しつぽを巻いて逃げずにぐつとこらえて川崎先生について行けば学べる事がたくさんあるとわかつたからだ。その、学べるもの一つは知識を利用する知恵がすばらしい事だった。もう一つは、バスケット選手に対する愛情の深さが並大抵のものではない事だった。

二人目は中村監督である。

中村監督と私はバスケットボールのコーチとして同時にスタートした。昭和四一年。私が長崎市立桜馬場中学校、中村監督が鶴鳴女子高校だった。私は長崎大学卒業後の初任地だったが、中村監督は優秀な選手だったので大学を出てすぐ実業団に入り、選手として一年勤めた後に教職の道を選んだから年齢は彼が先輩だった。大学に入る前に呉服屋の丁稚奉公をしていた事があるので都合二年先輩になる。

私が中村監督に初めて逢つたのは彼が大学三年生の時だった。私がコーチをしていた長崎西高校が静岡インターハイに出たのでそれを見に来たのだった。彼を連れてきたのは私の高校時代の一年先輩の中村脩氏だった。

次に逢つたのは中村監督が四年生になる前の三月だった。芝浦工業大学が春休みに熊本で合宿をやる事になっていて、その途中に長崎に立ち寄つたのだった。この時も中村脩氏が連れてきた。私もチームの合宿中だったので彼に少し選手のプレイの手直しをしてもらった。「この人は教えるのが好きな人なんだな」その時そんな印象を受けた。

私が大学四年生の最後の冬、代々木第二体育館に全日本選手権を見に行った時、彼は秋田いすゞというチームの選手で日本鋼管を相手に試合をしていた。その全日本選手権の試合が終わつた後で、彼が今年限りで実業団をやめ、教員として長崎の鶴鳴女子高校に来るといふ事を聞いた。もちろん学生のバスケット選手の事ならどこの選手の事でもよく知っている川崎先生の仕業だった。

話は少し戻るが、私が大学四年生になった時、長崎の三菱電機に日体大のキャプテンをしていた橋本氏が就職された。私は毎夜、三菱電機の練習に混ぜてもらいに行つた。夏休み等は午前が母校のコーチ、午後が大学の自分の練習、夜はまた三菱電機で練習というように一日中練習した。その頃のバスケットの情報と言えば、正月の全日本選手権のスコアが新聞に載る程度で今のようには日本リーグが地方を回る事もなく、NBAはもちろん国内の試合のテレビ放映もなかったから、我々のように地方でやっている者は中央の情報に飢えていたのである。だから橋本氏から少しでも多く中央の情報を得ようとした。

そんなところへやってきたのが中村監督だった。中央の情報に飢えていた私が彼をつかまえないわけはない。彼は彼で、秋田の出身だから長崎に来て誰も知り合いない。川崎先生以外で面識があると言えば私しかいなかったのである。そんなわけで、それぞれがそれぞれの目的を持って互いに接近したのであったがそれはたちまちどうでもいい事になってしまった。

「ここをこうすればうまくいくと思うんだけどバズさんはどうしてるんだろ？」そう思って聞いてみると、「おまえもそこに気がついたのか？俺もそうなんだよ。俺はな、こうしてみたんだ」と返事が返つ

てくる。次に逢った時、指導方法について話してみると互いに考えている事がピタツと合う。そんな事が重なって私たちは急速に親しくなっていくた。

何よりも強く感じたのは、中村監督は追及心が人一倍強いという事だった。私もまた気になる事があるとそれが解決するまではとことん調べたくなるタイプである。だからもちろん「熱心さにおいては誰にも負けないぞ」という自負心があった。そんなところへ中村監督が出現したのである。この人に逢って、「俺は誰にも負けないぞと思っていたのは、とんでもない思い上がりだな。こんな人がいるんだ」と思った。中村監督は情熱と追及心のかたまりみたいな人だった。

三人目は選手である。原田五月だ。

原田を私が見つめたのは彼女が高校二年生の六月、佐世保で行なわれた高校総体の時だった。対馬の豊玉高校がシード校の長崎西高校を破って決勝リーグに残った。対馬の高校が決勝リーグに残るのは史上初めての出来事だった。その豊玉高校のエースが原田だったのである。

確かに身体的な能力がすごい選手だった。走ったり跳んだりする彼女の動作が女の試合に男がひとり混じっているような違和感さえ与えた。高校総体後の国体選手選考会議で彼女は選手に指定された。監督は私だったからその旨豊玉高校の先生に連絡し、夏休みに入ったらすぐ練習によこしてくるよう頼んだ。しばらくして届いた返事は練習参加の事についてはなく転校についての問い合せだった。親戚と本人が相談をして、「そんなに見込まれてるんだったら、いっその事転校させてもらえば？」という事になったのだそうである。

そうして原田は鶴鳴に転校する事になった。原田が長崎に来る事になったので、そのあいさつの意味も含め、その夏は対馬で合宿をした。その時私は町長さんにもあいさつに行った。普通そんな場合には先方の校長先生と関係の先生方にあいさつするぐらいだが原田は特別に町長さんにも可愛がられていたのでそうだった。

「この子が豊玉からいなくなると町の灯が消えたようになるんですよ。五月、いやになったらすぐ帰って来いよ」これが町長さんのことばだった。

原田は天衣無縫、明朗快活、頭脳明晰、運動万能など、人間に対しての誉めことばがすべて当てはまる人物であった。それは、対馬という狭い場所にいたからではなく最初から長崎にいたとしてもそうだったと思う。だから当然誰からも好かれる。本人自身も挫折感を味わったり人間不信に陥ったりした事はなかった。それが大きな夢を抱いて長崎にやって来てから一変した。

彼女のバスケットは鶴鳴の選手の中に入れてやるにはひど過ぎた。勝手にやらせると味方の邪魔になるし、彼女を活かそうとすると他の選手は何も出来なくなるのである。だから基本的な動きの約束を教えようとする。しかし原田はさっぱり理解できない。彼女はそれまでの生活の中で、自分の感じた感覚でサツと行動を起こし、それが何の障害もなく認められ、それがよい結果となる生活しか経験していなかったのである。

だから、他人が作った型にはめるのは彼女を活かすためには得策ではないと私もすぐにわかった。しかし、少しはバスケットの基本的な動きをわかってもらわなければこの先彼女が困るのは目に見えている。そこで私は、彼女にバスケットの基本的な考え方を教えようとした。しかし、長い間に習性として身についたものを変えるのは容易な事ではない。

「よし、やった」と本人は思う。見事なロングシュートが決まったのだ。「ストップ！」私の声がブレイを止める。「メイ（原田のニックネーム）。よく見てみる。今のはドリブルシュートを狙う場面だろう。ロングシュートを狙う場面じゃないだろう」と私が指摘する。「シュートは決まったのに、なぜ

いけないの？」と原田は思う。

毎日毎日がその繰り返しである。始めのころは私も原田の本能的なプレイを殺すまいとして気を使いながら教えていたが、そのうち「いいかげんにしろ！こんな簡単な事をどうして覚えられないんだ！」と、教えるよりも怒る方が多くなる。そして、事を急ごうとする私の焦りが暴力を生み出す。原田の頭がパニックに陥るのに時間はかからなかった。

原田が脱走したのは転校してきて三ヶ月目だった。福岡の友達の下宿先だった。さらに三年生の五月に二回目の脱走をした。今度は東京の姉のところだった。普通、三年生にもなると脱走はしない。むしろ、悩みを抱えている下級生の相談役になる。しかし原田は、下級生が抱えるような悩みを三年生まで引きずっていた。それはしかし、無理もない事だ。みんなより一年遅れで鶴鳴のバスケットに飛び込んだ原田は、ほかの選手が一年生の時に味わう挫折感や無価値感を一年遅れで、しかも超特急で味わいながら同時にチームの大黒柱としての活躍を要求されたのだから。

今までに、壁に突き当たって苦しむ選手の姿は数えきれないくらい見続けてきた。しかし、原田の苦しみ方は尋常ではなかった。それは原田がそれまでに他人と比べて常に別格の存在だったからでもある。その落差があまりにも大きく、本人の戸惑いは他の選手のそれとは比較にならないほど深刻なものだった。

原田は、自分がいかにバスケットを知らないかを知った。いかに覚えが悪いかを知った。すぐパニックに陥る自分を知った。言いようのない挫折感を味わった。かつて他人を恨んだ事などないのに人を憎む自分を知った。どれもが初めて知る自分だった。

プレイの行き詰まりと、初めてさらけ出された自分自身の姿は原田を思う存分打ちのめしたが、原田の外見上の豪快さがそれをカムフラージュしてしまい（原田が意図的にそうしたのではないが）、他人の目にはその深刻さがわからなかったので一層痛々しかった。

私は原田五月を通して、どん底まで落ち込んだ人間の苦悩する姿を見続け、もうこれ以上落ちる事はないというどん底から這い上がってくる人間の姿を見続けた。後に、日本のバスケット史上何本かの指に入るほど有名になった彼女も、誰にも気づかれないところで自己嫌悪に陥り、人間不信に陥り（暴力の絶えない私に対しての不信感がその大半であるが）、意気地のない自分をさらけ出した時期があったのである。

私は原田五月によって、自分のどん底を見た人間でなければ本当に強い人間にはなれないという事を教えられた。彼女が実業団の選手を引退する時に、原田五月についてのコメントが欲しいというので出版社のリポーターFさんからインタビューを受けた。

「あの人はねえ…」

「え？ あの人…ですか？」

私が原田をあの人と言ったのに対し、Fさんは驚いた。そう、あの人なのである。私はあの人に「人間とは」という事を教えられたと思っっている。決して、あの人にバスケットを教えたとは思っていない。だから私は、原田五月に対して「あの子はねえ」とか「あいつはねえ」とかは言えないのである。

一 一 がむしや（一九二二年目）

有言実行

昭和四一年四月、私は長崎市の中心部にある桜馬場中学校に赴任した。

「俺は長崎で優勝しようなどとは思っていないぞ。北九州大会で優勝するのが目標だ」

長崎市内の大会ですら一回戦で勝てるかどうかもわからないようなチームの選手に対して、私が最初に言ったことばである。その頃はまた中学生の全国大会は開催されておらず、中学生の大会としてはこの北九州大会が最高レベルの試合だった。もし全国大会が開催されていたら私は、「全国優勝するのが目標だ」と言っただろう。要するに私は、赴任早々大風呂敷を広げたわけである。

若い頃の大言壮語は敵を多く作る。学校の内外を問わず、私に対しての風当たりは強かった。

「生意気な奴だな」

「勝利第一主義は正しい部活動のあり方じゃないよ」

「あいつは体育館や選手を自分の所有物だと思っっているんじゃないか？」

私は有形無形でこのような批判を浴びた。中には正しい指摘もあったが、先輩になかなか頭を下げない生意気な後輩なので悔しまぎれに私の悪口を言う者もいた。

いずれにしろ、私は自分がまいたタネで自分をしばる事になった。大風呂敷を実現しなければただのホラ吹きになってしまう。私は必死になった。後になって気付いた事であるが、何かをやるうとする時に私は、自分をそういう風に、やらざるを得ない状況に追い込んで自分の逃げ道を塞いでしまうタイプの人である。

技術を教えるのはもちろん一般のしつけまで、すべての事を無から出発しなければならぬので時間がいくらあっても足りない。だから私は、まず早朝練習を始めた。早朝練習では選手よりも早く学校へ行き、選手が登校する頃には体育館のモップがけを済ませて選手を待った。それは、選手のシュート練習の時間が少しでも多くなるようにという私の素直な気持だったのだが、そのような私のやり方は選手に非常に大きな負担になる事が後になってわかった。しかし、その当時は夢中で何も見えなかった。

定期考査の一週間前は部活動の練習は中止というきまりがあったが私はそれを破った。当然私は問い詰められる。私はなぜいけないのかを聞いた。

「テスト前は学習に集中させなければなりませんよ」という答えが返って来た。

「練習中止にして早く帰すと生徒は学習に集中しますか？」と私は問い返した。

その後のやりとりで私を納得させる答えは返って来なかった。

試験前の練習をいつもと同じようにやるわけがない。三〇分程度のシューティングをして帰す程度だ。それが学習の邪魔になるとは思わない。

部活動を本気で一生懸命やる選手は家庭の学習もちゃんとやる。それは確かな事である。が、それでもたまたま試験の成績が下がる事がある。そうになると、そうでなくても部活動が原因で成績が下がったと言われる。学校の教師ばかりではない。保護者も、こどもの学習成績が下がるとその矛先を部活動に向ける。それがいやだから私は成績の思わしくない選手の家庭教師を買って出た。練習が終わった後の家庭教師だけでなく、全ての公式戦が終わった三年生に、夏休みや冬休みを利用して高校受験のための学習指導もした。

大風呂敷を広げた手前、やらざるを得ないから当然選手にも注文が厳しくなる。私は選手に注文を厳しくするのなら自らの生活も正さなければならぬと思い、それを実践した。人を動かす立場にある者としてもつとも怖いのが部下からの反発である。その反発にもいろいろある。

「あの先生は話が長くて……」

「あの先生、何考えているのかさっぱりわからない」

「あの先生、すぐ殴るから嫌いだ」

「あの先生、私達には厳しく言うくせに自分はだらめじゃない」

と、コーチがいらないところで選手はさまざまな不平を言う。その中でもっともいけないのが、最後の「自分はでたらめじゃない」というやつである。指導力がないための不平不満は年数を重ねれば解決される可能性があるが、コーチの姿勢に関する事は若いからとかベテランだからとかいう事とは関係ない。だから、コーチの姿勢に関する事で選手に不平不満が出るようではもつおしまいなのである。

私はそう思うから、自分の生活を選手から不平不満の出ないものにしようと努力した。学生時代からそうであったが、運動によくない酒やタバコは一切口にしなかった。また、勉強以外の事で夜更かしは絶対にしなかった。大学時代にコンパに顔を出したのは卒業前の謝恩コンパだけだったし、勤め始めてからもそれは変わらなかつた。練習を選手だけでやらせて、自分はつきあいや宴会で夜の街に飲みに行く事はほとんどない。

「たまにはつきあえよ」と言われる。

「練習ですから」といって私は断わる。

「職場のつきあいも大切なんだよ」と言われる。

「酒飲みにつきあつたらチームが強くなりますか？」と私はやり返した。

「おい、一杯ぐらい受けるよ。酒ぐらい飲めなきゃ人間が狭くなるぞ」と、たまに宴会の席に出ると言われる。

「その酒を飲みますから、この後で私とぜんざい食べに行きましょう。つきあってくださいよ」と私は言う。

すべてがこんな調子だった。当然、「あいつは変わり者だ」というレッテルを貼られる。しかし私は自分の考えを変えようとは思わなかつた。

そんな私だから、監督と称する者が何やかやと理由をつけて練習の途中で抜けたり、練習に遅れて来たりするのを見るといい気分がしない。ましてや練習は選手たちだけでやらせておいて仲間と連れ立って遊びに出かけるなどとてもない。そんなやつを見ると殴りつけてやりたくなる。

そんな変り者の私がなんとか自分のわがままを通せたのも最初に仕えた体育主任の入井先生がふところの深い人だったからであつた。前例のない早朝練習を始めた事に対してもテスト前は練習禁止というきまりを破つたのに対してもあちこちからクレームがつく。そんな事をすべて自分のところで止めて勝手に勝手放題の事をやらせてくれた。

飲み会に顔を出すのも、「おまえは練習が終わつてから来い」といって無理やり連れ出そうとはしなかつた。みんな酒を飲んでいても私はトマトジュースだった。「一杯ぐらい飲め」とは決して言わなかつた。「無理して飲めるようにならなくてもいい」そう言つて私のコップにトマトジュースを注いでくれた。「はあ」と言つて私は受ける。そうやってトマトジュースを七本飲んだ事があつた。腹がガボガボいって気分が悪くなつた。

富士男

繁華街に富士男という喫茶店がある。そこが私と中村監督のデートの場所だった。私たちは毎晩のようにそこでミーティングをした。その頃の私たちは何時間一緒にいても話題が無くなる事はなかつた。他人が聞けば他愛のない話でも私たちには常に新鮮で、それが明日の力になつた。

話の内容はもちろんバスケットに関する事ばかりだが、いつも難しい議論をしていたわけではない。互いのチームの選手がどうしたとかこうしたとか、ちょっとでも何か変わった事があればそれを話題にした。

しかし、このデートの場所もそれからしばらくして変わった。中村監督が下宿先を変える時、その新しい下宿先に私も身の回りのものを持って居候する事にしたのである。毎日のコーヒー代ももったいなかったし、こうすれば閉店時間も気にせずによく話せる。私は長崎市出身だから自宅はあったが、私にとっては自宅でくつろぐ時間よりもミーティングの時間の方が大切だったのである。

毎晩遅くまで話をしているとやはり睡眠不足になる。しかし、どんなに眠くても眠そうな顔は出来なかったし、「もう寝ましょつか」なんて自分の方からは言えなかった。そんな事を言うと熱意が足りないと思われそうなので、無理やり目を開けていた。そして翌日は睡眠不足でボーンとしていた。

その頃のエピソードにはこと欠かない。私たちはバスケットの教師ではなく、それぞれの教科を受け持っているのだからそっちの勉強もしなければならぬ。私は保健体育だったが中村監督は芝浦工業大学だから教科は物理と数学を持たされていた。

「おい、明日の授業の準備をしてないよ。おまえ、これとこれと解け。俺はこっちの方をやるから」中村監督は私に数学の問題を解かせる。「だめだ、これじゃ一時間保たねえや。おい、何か話のネタがないか」そんな事が何度もあった。

ある日、先に帰った中村監督から電話がかかった。「おい、大変なことが起きたぞ！ すぐ帰って来い」何事が起きたかと思つて急いで帰ると、のら猫が押し入れの中でこどもを産んでいた。追い出そうとするのでフツツと言つて母猫が怒る。中村監督は相手が人間だと強いけれども相手が動物だとまるでダメだった。「おまえ、なんとかしろ！」ことは命令形だけど顔は真つ青だった。コートでは鬼かと思われるほど恐ろしい人のこんな姿を見ると何か嬉しくなってしまうものである。その日は中村監督に勝つたような気持ちで優越感に浸つた。

下宿の大家さんがニワトリを飼つていた。ニワトリというのは朝早く鳴く。それもまだ暗いうちにだ。私は神経質だからそのニワトリのコケコッコが気になって仕方がなかった。で、ある日「このやろ、静かにしろ！」と、ニワトリ小屋をさかさまにひっくり返して部屋に戻つた。しかしニワトリはやっぱり鳴く。頭に来てまたニワトリ小屋に行つてみると、小屋はさかさまになっているがニワトリはさかさまになっていない。ニワトリ小屋の天井が床になっていてその床になった天井にニワトリはちょこんと立つて元気にコケコッコをやっているのである。

「ニワトリ小屋をさかさまにしたからって、ニワトリまでさかさまになるわけないよな」と、一人で苦笑いして部屋に戻り、寝る事にした。この事件で私は大家さんの機嫌をそこね、中村監督の下宿先を追われる事になった。後になって考えるとつまらない事に意地を張つたり、大した事でもないのに一喜一憂したり、バカげた事をやつたりしたが、毎日毎日が充実していた。

ひとりよがり

かけだしの頃の四―五年の事は恥かしくてあまり話したくないが、正直に話しておかなければならない。恥をさらしても正直に話しておく方が若いコーチたちの参考になると思つたからだ。

まず選手をよく殴つた。はつきり言つて、最初の三年ぐらいはコートへ出るのが指導をするためではなく、へまをした選手を見つけて殴るのが目的みたいなものだった。しかし、三年経つと殴らなくなつたかというところではなかった。「いけない！」と思つただけれどもやつてしまふ。もちろん殴り方も年月とともにソフトになるし回数も減る。が、やっぱりたまりかねてやつてしまふのである。「もう私は殴りません」と、はつきり言えるようになったのは四〇才を過ぎてからである。

次に練習時間がやたらに長かった。練習の質を考えられるほど私の頭も上等ではなかったし、指導力

がないから練習効果が出るまでには時間がかかるのである。それとも知らず、体育館を出るのが一番遅いバスケット部がもっとも熱心な部活動なのだと思います。

話も長かった。練習中の注意もくどくどとやったが精神訓話も多かった。今思い返すとこれが一番恥かしい。ミスを咎めて小言を言う。それがきっかけでダラダラとしゃべりまくる。その長話の間、選手は直立不動で身じろぎもさせない。それを厳しいしつけど思い込み、自分のことばに酔いしれる。

選手は私が怖いから身じろぎもしないで聞いているが、まとまりのない話を長々と聞かされてその内容が頭に残るはずがない。そんな事も気がつかないほど愚かだった。

このような事は全てが自己中心的な考えから発していた。何をやるにも、「俺はこんなにがんばってるのに……」「俺はこんなに真面目なのに……」と、全ての事に「俺はこんなに……」が優先されるのである。相手の事など考えてやるうともしない。それもこれも、「あいつはまだ若いから仕方ないよ」という理由だけで周囲の人々が目をつぶってくれたから出来た事だった。

やめたいやつはやめろ

口頃のふるまいを見ると、私よりも中村監督の方がはるかに短気でわがままに見える。ところが、コーチという立場で考えると私の方が淡泊で彼の方が辛抱強かった。

厳しい練習をしていると途中で挫折してしまう選手が必ず出る。そんな時に「やる気がなくなったらやめればいいさ」と言って取り合わないのが私のやり方だった。中村監督はそんな私によく言った。「おまえは短気だからいかん。俺はたとえそいつが嫌いな選手であっても、勝つために必要な選手ならゴマすつても引き止めるぞ」

後に私は勝海舟の大ファンになるが、この頃の彼がまさに海舟であり私が小栗おぐりであった。海舟は江戸幕府が倒れて明治新政府になる時に、幕府側の人間でありながら新政府樹立のために奔走した。海舟の心の奥には、徳川幕府の維持というより日本国を外国の脅威から守るという考えがあった。即ち徳川は『私』で日本国は『公』であり、海舟はどんな行動を起こすにも、この『私』より『公』を優先するという考えが根底にあった。

スケールが大き過ぎると一般的には理解されない。だから海舟は多くの人々から逆族呼ばわりされて命をつけ狙われた。一方小栗は、「薩長の犬に頭を下げるくらいなら死んだ方がましだ」と言って頑強に抵抗した。その結果小栗は、薩長連合群によって斬首の刑に処せられた。日本人的感覚では、小栗の方が「武士道精神の鏡だ」として英雄視される。小栗は頭脳明晰な人間であったから、心の中では奥の深いことを考えていたかも知れないが、どんなすばらしいアイデアを持っていたとしても死んでしまつては何もできない。

あの福沢諭吉でさえ、海舟のそんな行動が理解できずに批判する手紙を送っている。「あなたは幕府の人間でありながら幕府が崩壊するのに手を貸し、しかも新政府になったらそちらの方の偉い役職につくとは何事ですか。私はあなたの考えがわかりません」これに対して海舟は、「あんたみたいに何もしないで口先だけの人間にわかりはしないよ」という返事を送っている。それくらい偉い事をやるというのは大衆受けのしない事なのである。

私のやり方も、口では「勝つためにやっているんだぞ!」と勇ましい事を言いながら、やっている事はと言えば、自分と波長の合う人間だけを相手にしてままごとみたいな事をして喜んでるに過ぎなかったのである。

これもずっと後になって知った事だが、一旦やめた選手がまた「もう一度やらせてください」と言っ

て戻ってきた背景には中村監督の隠密行動があったのである。

中村監督は私の性格を全て見抜いていた。何かごたごたがあると私はプイツと怒ってしまった、相手が頭を下げてくるまでは決して自分からは行動を起こさない。そんな頑固なところがあるからほったらかしにしておくとするずるただ日過ぎてしまっただけである。中村監督はそれを知っているから、私に内諾で選手の家に行き説得するのである。

「あいつは、気持の中では早く戻ってきて欲しいと思っっているくせに頑固だから口に出しては言えないんだよ。おまえがやめればチームが弱くなる事はわかってるじゃないか。戻ってやれよ」自分の選手でもないのに中村監督はこうやって桜馬場中学校の選手を説得し、事件解決に奔走していたのである。

桜馬場中学時代の二年目に桂木という選手がいた。運動能力抜群でポイントゲッターとして活躍していた。その桂木が、中体連を目前にしたある日突然やめると言い出した。この時はかりは私も慌てた。慌てた理由は、試合直前だったからというのも幾分あるが、それよりも、桂木はもう私の懐に入ったと思っていた選手だったからであった。

私はすぐに家庭訪問をして説得に当たった。心の底から自分の気持を述べた。しかし桂木は、両親を含めた誰もが復帰を望んでいるにもかかわらず、自分の意志を曲げなかった。説得は失敗に終わり、私はうちひしがれて桂木家を出た。桂木家を出た後私は、自分の誠意が通じなかった事が悔しくて暗がりの路地で泣いた。私が桂木家で説得に当たっている間、外で待っていてくれた中村監督が私の肩をたいて言った。「しょうがない。きょうはこれで帰ろう」

私はそれっきり桂木家には行かなかった。いつものようにヘソを曲げたわけではない。説得にあたった時にこれはもうだめだという感じがしたからである。ところが、中村監督はその後私に内諾で何回も桂木家に足を運び説得に当たってくれていたのである。自分のチームの選手でもないのに。しかし、それでも桂木は遂に帰っては来なかった。

桂木の一件は私の後々の考え方に大きな影響を与えた。一つは中村監督と私の違いに気づかせてくれた事である。もう一つは、桂木の事を調べていて、私が選手に対してよかれと思ってやっていた事は、私が一方的に自分の都合を押しつけていたに過ぎなかったと気づかせてくれた事である。

私は桂木を手塩にかけて育てたつもりでいた。だから、桂木の態度に『裏切り』を感じた。しかし、桂木は生い立ちが複雑な選手だった。桂木は大人の真の愛情に飢えていた。そんな桂木にしてみれば私の行為は、「山崎先生が私に一生懸命になるのは、私のためではなく自分の野望を達成するために一生懸命になっているだけ」としか感じていなかったのである。そしてそれは事実だった。

人はそれぞれ、生い立ちが違うし生活の背景が違う。だから、考え方も感じ方も人それぞれに違うのである。人を動かそうとするならそのような事を充分知った上で、まず相手を受け入れる努力をしなければならぬ。桂木の一件も、担任に聞いてみるとかあるいは日頃の観察を注意深くするとか、ほんのちよつとした努力をしていれば本人をここまで追い込む前に処置ができたはずである。

練習がすべてだ

練習試合といわず公式戦といわず、試合の時のベンチ采配ぶりは今考えるとでたらめだった。まずタイムアウトだ。相手の監督がタイムアウトをとった時は、ベンチに戻った選手の顔も見ず、プイと横を向いて不貞腐れていた事がしばしばあった。これでは選手は汗を拭く事もできない。

また、自分が取ったタイムアウトでは、貴重な一分間を出来の悪い選手を罵倒するために費やすのである。試合中にタイムアウトをとるタイミングやタイムアウトの時に話す内容、或いは選手交代につい

て細かく考えるのは口頃あまり練習をしないコーチが、その場のごまかしてやる事だと決めつけていた。「試合で起こり得る事はすべて練習でやっている。うまくいかないのはお前たちの精神がたるんでいるからだ」と、精神論一本やりで片付けていた。

実際は、「相手のA選手はうちのB選手ではとてもおさえきれない」とか「相手のゾーンディフェンスを攻めあぐんでいるなあ」と気がつく。しかし、気がつきはしても具体的な対応策が浮かばない。そこで指導者の権威をふりかざし、その責任を一方向的に選手に押しつけて自分はぶんぞり返っているのである。

私は四四才の時にはじめて、「どつやら少しだけバスケットがわかりかけてきたかなあ」という気持ちになった。それは、ボビー・ナイトのビデオを見ていて突然バスケットボールというものが見え出した事に始まる。当時は、それから二〇年もの間バスケットの奥の深さがわからずに苦しむ事など予想もしないから、「俺の練習は、試合で小細工をしなければならぬほど幼稚なものではない」などと言って一人前のコーチのつもりでいた。思い起こせば恥かしいかぎりである。

フリースロー

めちやくちやな練習であつても量をこなしただけ強くなり、赴任して一年後の春、長崎市内の新人戦で優勝した。三点差の辛勝だった。

試合は終始オールコートのゾーンプレスで相手を乱戦に引きずり込み、ゲームコントロールをさせない。自チームの攻撃はと言えば「走れ!」「行け!」と選手をあおるだけ。足が止まり、やむなくセツトオフェンスで攻撃しなければならなくなったら田中にジャンプシュートを打たせるだけである。馬車ウマみたいに鍛え上げた体力で相手を疲れさせるといふ、実に野蛮で幼稚極まる試合運びであった。それでも勝ちば勝ちだ。

ひき続き六月の中体連で優勝し、さらにひと月後、北九州大会の出場権をかけた県中体連大会に出場した。そして、この大会でも決勝まで駒を進めた。決勝の相手は、名監督米沢先生が率いる佐世保市代表の福石中学校である。米沢先生は前任校の相浦中学校でも北九州大会優勝の経験を持つ優秀な指導者である。

決勝戦はオフェンスの華麗さを誇る福石中学校に対し、終始オールコートゾーンプレスで走り回る桜馬場中学校という好対照で、双方一歩も譲らず延長戦にもつれ込んだ。その延長戦終了間際、福石中学校の反則でセンターの山下がフリースローを得た。差は二点。フリースローを二本とも決めれば再延長である。ところがフリースローは二本とも失敗。リバウンドボールも相手に取られて試合は負けた。

この試合は福石中学校の反則が多く、当時のスコアを残していないが、確か二〇本以上のフリースローを得たはずである。そして成功したフリースローは確か二二三本だったはずだ。「あんなに落としたフリースローを、あと二二三本決めていれば勝っていたのに」試合が終わったあとで誰からもそう言われた。しかし、この試合でたまたま選手がフリースローを落としたのではない。普段の練習で私はフリースローを軽く見ていたのである。「ファウルされてもシュートを決めてくればいいんだ。フリースローの練習なんかやる暇ないよ」そう言って、自分は高度な練習をしているつもりでいた。それが敗因だった。

さらにいけないのは、試合が終わった後で私が選手に言ったセリフだった。「おまえがフリースローを落としたから負けたんじゃないか」コーチとしては絶対に言ってはならないセリフを私は山下に言うてしまった。しかも、フリースローの練習なんかさせなかつたくせに落とした責任を選手になすりつけ

たのもっといけなかった。これもずっと後になって気がついた事だった。

初の県外遠征

県大会では二位だったが、北九州大会への出場権はある。初めての県外遠征は熊本だった。初めての事なので、各県代表のレベルがどの程度のものなのか、自分のチームの選手がどんな試合をしてくれるのか皆目見当がつかない。試合の前夜のミーティングでは自分たちが練習してきた事を細かく確認し、消灯を九時半と決め、私自身も翌日の試合に備えて一〇時に床に就いた。

翌日の試合は、一回戦が福岡一位の尾倉中学校であった。福岡は何の競技でも他の県よりレベルが高い。尾倉中と戦いながらもそれは感じた。どのプレイをとっても桜馬場中は幼稚で尾倉中がスマートなのである。無理やり桜馬場中が優っているところをあげれば元気があるというところだろう。しかし試合は、その元気だけで桜馬場中が勝った。例によって桜馬場中は終始ゾーンプレスである。試合のベースも何も無い。ただめっちゃくちゃに動きまわるだけである。だから、尾倉中の選手たちが「なんだこりゃ？」と思っっているうちに試合が終わってしまったという感じである。

私は自分の作戦や采配で勝ったわけでもないのにおおいに喜んだ。福岡の一位という事は九州の一位と言ってもいい。そのチームを一回戦で破ったのだ。元気が出ないわけではない。

「よし、優勝を狙うぞ」と張り切って二回戦に臨んだ。二回戦の相手は熊本一位の西部中だった。しかし、この試合では一回戦とは別のチームのように桜馬場中の動きが鈍かった。そうなるとセットオフエンスはゼロに等しいチームだから目も当てられないほどみじめな試合になる。大差がつき、どうにも手の施しようがない試合を目の前にながら、「初めての県外遠征だ。こんなものなんだろうな」と、私は悔しさと選手への同情が入り交じった複雑な思いをかみしめていた。

ところが、試合が終わって長崎に向かうバスの中での選手の会話が私の神経を逆なでした。

「きのう、私にまくらぶつけたのあんたやろ」

「違うよー」

私は、その場で殴りつけてやりたい衝動を抑えて長崎まで帰った。長崎に着くまでの長かったこと長かったこと。長崎に帰った翌日からの練習は、練習という名のもとに行なわれた制裁だった。もちろん全員殴った。倒れた選手を引きずり起こしたまた殴った。

「勝ちたいために自分の生活を切り詰め、コートの上に自分の全てを投げ出して練習してきた日々は何だったんだ！自分がやっている事を何だと思っていったんだ！苦しい練習に耐えたおかげで初めて勝ち得た栄冠。そして初めての県外へ出ての試合。それと、みんな寝ないで夜通し騒ぐ修学旅行と同じだったのか！」選手の胸ぐらをつかんで私はそう言った。二〇年経った今でもこれは悔しい思い出である。

初めて勝って選手が有頂点になり、それで一年間の苦勞を台無しにし、こんなみじめな思いをしている私とは対照的に、米沢先生が率いる福石中学校は堂々の優勝で凱旋した。

げんこつ

ある日私は校長室に呼ばれた。以前、赴任早々に一度呼ばれた事があった。その時は廊下を忙しく歩く私のスリッパの音がうるさいと注意された。末武校長は大変厳格な人で、教師はまず何よりも自分の身なりをキチンとしなければならぬという主義だった。だから、背広にネクタイを着用した服装では

なくジャンパーなどで授業をしようものなら直ちに呼ばれて注意された。校長室には常に何本かのネクタイが用意してあり、「これ、君にあげるからちゃんとネクタイをして授業をしなさい」と言われた教師は多い。

桜馬場中学校の職員室の机の上は何も置いてなかった。「机の上にバリケードを築いて、自分の顔を隠して仕事をするとは何事だ。机上はいつも整理してどこからでも見えるようにしておきなさい」というのが校長の考えだった。

さて私が校長室に入っていくと、末武校長が用意していたのは私への忠告だった。しかしやさしかった。カミナリは落ちなかった。忠告の内容は、私がしばしば生徒に振う暴力の事についてであった。体育の授業中に私から殴られた生徒の保護者が教育委員会に通報したらしい。その事が教育委員会から末武校長のところに連絡されたのである。

「お、来たか。まあかけなさい」

「は…」

「どうだ、もう慣れたか？」

「はあ、なんとか…」

この前、スリッパの音が大きいので注意された時は眉間にしわを寄せて不機嫌そうな顔をしていたが、今度はこのように終始おだやかである。「実はな、誰か保護者が教育委員会に電話したらしくてな…」と、私を呼んだ理由である本題の暴力事件の事について話題が入っていった。「殴りたくなったらな、げんこつを一回二回と撫でてみる。そうするとそのうちに気持が治まるよ」

私は末武校長の話の内容よりも末武校長の態度そのものに心を打たれて聴いていた。末武校長の態度には終始私を傷つけないようにという配慮が伺えた。この前スリッパの音の事で注意された時は『しつげ』だった。しかし今回の事は、私の『熱心の度が過ぎたための暴走』をあくまで立てて話をしてくれているのである。熱心であれば暴力行為も許されるという事には決してならない。しかし、末武校長はそれを百も承知で私の熱心さを立ててくれていた。決して頭ごなしに「暴力は絶対にいかん！」と言って私を叱りつけたりしなかった。

「あの、カミナリ校長がこんな私のためにこれ程までに気を使ってくれている」私はそう思いながら話を聴いていた。そして決定的だったのは、「でも、どうしてもがまんできずにやってしまった時は仕方がない。俺が責任持つ」と言った末武校長のことばだった。これは当時校長会長でもあった大校長としては「校長会長自ら暴力を肯定するのか！」と槍玉にあげられるかもしれないことばだから、本音はそうであつても立場上は絶対に言えないことばである。それを敢えて言ったのは、末武校長が私を信頼してくれていたからだろう。

当時の末武校長は五八才。私が二四才。親子ほどの隔たりがあり、しかも人間としてのキャリアも大差がある私に対して末武校長はあくまで私を立てて話をしてくれた。

所帯は小さくて、扱う対象はこどもたちだけれども、指導者として歩き始めたばかりの私に、この末武校長の態度は「人の上に立つ者というのはこうでなければならぬんだ」という事を強烈に印象づけてくれた。特に、末武校長が最後に言った「俺が責任持つ」ということば、それ以後の私のコーチ人生の中で頭にこびりついて離れないことばになった。

教育パパ・教育ママ。

こども可愛さのあまりあれこれと世話をやき過ぎる親を世間ではそう呼ぶ。このころの私が典型的な教育パパであった。選手が可愛いくて仕方がないから、あれもしてやるつこれもしてやるつと考えるのである。みんなを引き連れて映画に行ったり、お祭りに出かけたり、汐干狩りに連れて行ったりいろいろした。

練習では選手をサンドバッグの代りみたいに殴り、へばって立ち上がれないのを引きずり起こして練習をさせ、とても人間のやる事とは思えないほど無茶をしているくせに、一方ではそんなにされてまでもついでくる選手が可愛くて仕方がないのである。

後年、鶴鳴に移ってからわかった事だが、市外や県外に選手募集に行くとき最後の壁がほとんど父親なのである。曰く、「今から寮に入って部活動をやれば、卒業して戻って来たとしても十八才でしょう。するとすぐ嫁に行く年頃になるし…。そんな事を考えると寂しくて手放せませんですよ」

母親というのは最初は渋っていても本人が行きたいというのなら案外「本人のやりたいようにさせるのが一番いいですよ」と、あっさり折れる事が多い。母と娘、父と娘、同性と異性、このあたりに何か感覚の違いがあるのかもしれない。とにかく、世の父親は娘の事になると細かい事まで気になり、そして娘に弱い。

私もまったく世の父親と同じだった。強くするためのコーチであったはずが選手とともに過ごすうちに可愛くなり、選手をいつも自分の目の届くところに置いておきたいという思いの方が強くなってしまっていた。そして、そんなにまで選手を愛している自分自身に溺れ、そんな自分を真の指導者だと思いつ込んでいたのである。私は後になって、この溺愛の落とし穴に落ちてしまつて周りが見えなくなり、一生懸命やっているのだけれどもなかなか強くできない若いコーチに何度も接した。いずれその若いコーチたちも目が覚めるであろう。だが、自分の過去を思い起こして見ると、その若いコーチたちの気持がわかるだけに、「おい、いいかげんに目を覚ませ」と、なかなか忠告できないのである。

ボイコット

長いコーチ生活の中で、選手にボイコットされて練習が出来なくなったのが四回ある。その中でもっとも重傷だったのが昭和四三年春の事件であった。それは八七日間も続いた。

冒頭から再三述べているように、私の練習はめちゃくちゃだった。殴るし、練習時間は長いし、ほんのわずかのミスも許さないしで、選手にとっては一瞬も息を抜けない緊張した日々が続いていた。

春休みに入ったある日、私はキャプテンの吉岡のちょっととしたミスをとがめて大暴れした。そして遂に、怒り狂った私は自分の履いていたバスケットシューズを脱いで手に持ち、それでバシッと吉岡の頬をひっぱいた。そしてその翌日から選手たちはパツタリ来なくなった。

「なぜボイコットしたの?」と誰かが選手に聞けば、「あんな事までされてやりたくはない」と選手たちは言うだろう。しかし、それは直接の理由ではないと私は断言出来る。本当の理由は、「何々をされたから…」というのではなく、吉岡の事件をきっかけにして、長い間積みもりに積もっていた我慢が爆発したのである。だから、靴で殴らなかつたらこんな事にはならなかつたかもしれないのに、とは言えない。そのきっかけさえあれば遅かれ早かれ私は選手にこんなしつぺ返しを食らう運命にあったのである。

通常、この種の事件は時が経てばまた元の鞘に収まるものだが、この事件はそれほど単純ではなかつた。

た。日が経ち、家族や友達や担任が「もういいだろう。折角ここまでやってきたのだから戻りなさいよ」と説得しても彼女たちは頑固に意志を曲げないのである。

前に述べたように、私は選手に無理難題を押しつけるのだから自分の私生活にも厳しかった。それが、「俺がこれほど一生懸命やっているんだ。選手だって少々の事はがまんできるはずだ」という一人よがりの考えを増幅させていった。そしてそれが、この事件の大きな原因となった。

これも後になって気づいたことだが、「俺がやっているからお前たちもやれ」という考えで選手にやらせる事は、ほとんど自分がやっている事の数倍も苦しい事を要求しているものである。そんな事をやらせておいて「俺がこんなに真面目にやっているのにあいづらは不真面目だ」と思ってしまうのだ。それで事件が起きないわけがない。

傷口を大きくしたのは、選手が耐え続けてきた期間が長かった事、それに、やり方は無茶であっても時が経つにつれて、「先生も若いから間違っ事があるさ。でも一生懸命やってくれてるじゃない」と、私に味方する周囲の人々が増えてきた事である。選手は気持が和らぐどころかいつそう口を閉ざしてかたくなになっていった。

事件は解決する兆しが見えないまま一ヶ月が過ぎ二ヶ月が過ぎていった。三ヶ月目に入り、中体連が目前に迫ったある日私は遂に決心し、「きょうから一年生と一緒に再出発する」と宣言した。ところが、そうして練習を始めようとした矢先にキャプテンの吉岡が練習着に着替えて「先生、またやりますからよろしくお願いします」と言って現れたのである。私も一年生もキツネにつままれたようにポカンとしている。何がどうなったのかわからない。

しかし、「どうして？ なぜ？」と考えるよりも「よかった」という気持でいっぱいであった。「よくわかった」それから吉岡と一年生だけの練習が始まった。それを皮切りに、翌日は堀田と江副が、次の日は二年生の白浜と岩本と佐久間が次々に戻ってきた。

こうして、吉岡が戻った二日後には一年生の高倉を除く全員が戻ってきた。話は少し後の事になるが、高倉はおそらく自分のとった行動の責任をとったのだろう。桜馬場中学校では遂にバスケット部に戻っては来なかった。しかし、彼女は高校ではまたバスケットを始めた。そして一年生からスタメンになった。中学を卒業する時も高校に入ってからそして現在でも、高倉と私は同じ仲間としてつきあっている。

さて、こうして戻ってきた選手たちに聞きたい事は山ほどあった。ボイコットの真相は何だったのか、今になってなぜ戻って来たのか、誰かに説得されて戻って来たのか、それとも自分の意志なのか、等々。しかし、この事に触れるのが怖くて聞く事が出来なかった。それは、彼女たちが卒業してからもそうだし今でもそうだ。

苦しかった八七日間でギターを覚えた。しばらくやめていた囲碁も打ち始めた。しかし、何をやっても虚しさだけが心に残った。そして、その間何度も「教師をやめようかな」と思った。

吉岡

新キャプテンの吉岡は少し太っていた。それに、どんなプレイをする時でも右足だけしかピポットフットにしない癖があった。その両方を改造しようと私は試みた。

減量するにはダイエットしかない。ピポットフットを両方出来るようになるためにチーム練習の中に吉岡の個人練習のためのメニューを入れるわけにはいかない。そこで私は、「体重がキ口になるまでチーム練習には戻るな。ピポットフットが両足で使えるようになるまでチーム練習には戻るな」と命

じて吉岡を完全にチーム練習から除外する事にした。

それからの吉岡は、一人でグラウンドを走ったりチームの練習が終わるまで他のリングを使ってピボットシュートの練習をしたりしていた。ダイエツトを続けているために目まいがすると訴えた。左足をピボットフットに使えるようになったからチーム練習に入れてくれと何回も頼みに来た。しかし私はその度に「まだ充分ではない」と言って取り合わなかった。

そうして一ヶ月が過ぎた。ポイントゲッターをチーム練習からはずしたままいつまでも放っておくわけにもいかないので吉岡をチーム練習に復帰させた。復帰した吉岡はスマートになり、ピボットフットは完全に両方出来るようになっていた。

このような類のやり方は数えあげればきりが無い。とにかく「こうしたい」と思う事があれば徹底してやるのである。やりたい事がうまくいかなくて、これでもかこれでもかと夢中で練習している内に時計の針が九時にさしかかっているのに気づき、あわてて選手をタクシーで送り届けた事がある。

男子のチームを相手にスクリメージをよくやった。チームが強くなってくると、男子を練習相手にする事が出来るようになった。そして、男子のチーム相手にどのような戦いが出来るかで自チームの戦力を伺い知る事が出来るのである。その点、男女のチームがある学校の女子のコーチは練習相手探しをしないで済むから楽である。

さてそのスクリメージであるが、女子が強くなると男子もだんだん強くなってきて市内のベスト四ぐらいにはなんとか食い込むようになってきている。だから当然女子が挑んでもやっつけられる。理屈では当たり前だがそれが悔しい。

そこでこっちは不貞腐れて、スクリメージをやらせつ放しで知らん顔をしている。三〇分が過ぎ一時間が過ぎてもまだやめない。二時間経つ。それでもやめない。長丁場になると忍耐強いのは女子である。次第に点差が詰まってくる。二時間半経つたところで遂に逆転した。「やめー」そこでやつと私のことばが出る。

こんな事ばかりだった。要するに待てないのである。やった結果がすぐそこに表れなければ気が済まない。言った事、やらせた事が良い結果となつてすぐ表れるのを見たいからそうして強引な事ばかりさせる。そんな事の繰り返しばかりだった。

練習試合

悔いの残った練習試合が二つある。

桜馬場中学校時代、前述のように吉岡をチーム練習から除外している間に行なった江平中学校との試合がそのうちの一つである。当時の力関係は桜馬場中が一番手で江平中が二番手ぐらいだった。この練習試合はポイントゲッターの吉岡を抜いていたから接戦になった。しかし、桜馬場中が一点差で勝った。

試合後、いつもの調子で江平中の監督に話しかけようとする、「からかつちやいかんよ!」と激しいことばが返ってきた。吉岡抜きで相手をされた事に対して憤慨しているのである。確かに私は江平中を軽く見ていた。吉岡なしでも勝てるだろうと思っていた。しかし、それは勝ち負けの問題ではない。相手に対する礼儀の問題だ。私は江平中に大変失礼な事をしてしまったという事を、相手の監督に食ってかかれて初めて気がついた。「思いがり」「礼儀知らず」そんなことばがその後何日も私を攻め続けた。

自分の立場になって考えてみればそんな事はすぐにわかる事である。強いチームに挑戦する時は誰もが、「常勝のチームに一矢でも報いたい」「本当の強さというのを肌で感じてみたい」というような

思いでやるはずだ。そんな気持でやっているのにポイントゲッターは引つ込めたまま真剣さを欠く試合をされて、おまけに「いやー、強くなりましたね」などと、自分より一周りも年下の若造に言われて腹が立たない方がおかしい。

私はこの日の事を思い出すのが今でも恥かしい。だからそれ以来、練習試合はたとえ相手がどんなに弱いチームでもスターティングメンバーで相手をし、ベンチも一生懸命やるようにしている。それは、大差で勝ちたいからではなく、相手に対する礼儀として大切だからである。

鶴鳴に移ってから一つ悔いの残る練習試合が増えた。それは、昭和五六年の五月の連休に四国の香川から三本松高校が遠征に来た時だった。前に述べたように、私は原田をなんとかしなければならぬという思いで頭がいっぱいだった。そして、そう思えば思うほど原田の、追い込まれたらすぐパニックになる一面が気になって気になって仕方なかった。原田の日常から受ける印象が、どんな困難にもくじけずに立ち向かっていく逞しい選手に見えるだけに、その事が一層私のいらいらをつのらせた。

私はもう昔のように殴らなくなっていたし、特に自分のチームだけで練習する以外の場所では選手を殴らないようにしていた。しかし、三本松高校との練習試合における原田の臆病さが私の理性を失わせた。そして、三本松の小川監督も選手も見ている中で遂に私は原田に平手打ちを食らわせてしまった。その一発で私の眠っていた魔性が起き上がった。私はハーftimeに逆上して原田を追い詰め、殴った蹴った。原田は翌日、二回目の脱走をした。その事については前述のとおりである。

私は脱走された事ではなく、理性をなくして、身内だけの練習ではなく他校との練習試合の中で選手を殴ってしまった事を後悔した。今でも、その時の原田がどんな気持だったか、小川監督がどんな気持だったかを考えると本当に胸が痛くなる。

惨敗

さて、チームの事に話は戻るが、三ヶ月近くもボイコットされて練習出来なかったにもかかわらず、市の大会も県の大会も楽々と優勝する事が出来た。それから三ヶ月後が北九州大会だ。しかも、この年は順番により長崎で北九州大会が開催される事になっている。地元での大会だからみっともない試合は出来ない。私はこの三ヶ月間でチームの手直しをして北九州大会に臨んだ。しかし、八七日間も足踏みをしておいて強くなるわけがない。結果は惨敗に終わった。

一回戦の相手は福岡二位の大蔵中であつた。前半はどうにか戦えた。しかし私は、前半の様子を見ながら敗戦を覚悟した。選手の動きは重く、現役を引退した選手で作ったクラブチームが試合をしているような戦いぶりなのである。県大会まではそれほど目立たなかつたが、各県から鍛え抜かれたチームが集まる北九州大会では桜馬場中の動きの重さが際立って目立った。後半、試合は予想どおり一方的に押しまくられた。桜馬場中の後半だけの得点はわずかに五点。みじめな敗戦であつた。

さかのぼればその原因は八七日間のボイコットにある。八七日間も練習を中断して、なおかつ優勝しようなどと考えるのは毎日コツコツと努力を積み重ねている人たちに対して失礼千万な話だ。強いチームを創るには、毎日毎日コツコツと練習を積み重ねていかなければならない。それが出来るか出来ないかはコーチ次第だ。今回は、私がボイコットの原因を作り、そのためにこのようなみじめな敗戦を選手に味わわせる事になった。

私自身はこの反省を元にしてまた次のチーム創りに精を出す。「今度は失敗しないぞ」と思いながら。しかし、選手にとつては二度と帰らぬ青春のページだ。「勉強になりました」では済まされぬ。

長崎国体

長崎国体を前にして、教員チームの練習や遠征で忙しい日々が続いた。忙しいといっても大学を出たばかりの若い選手が主戦力だから私のような交代要員の選手が練習に出なかつたからといってチームが困るわけではない。だから、教員チームの練習で自分のプレイを上達させる事にはそれほど真剣ではなかつた。むしろ早く現役を引退してコーチ業に専念したいと思つていたくらいである。

しかし、私にとつて教員チームの練習は非常に有益なものになつた。それは、当時東京教育大のコーチをしていた笠原監督が強化コーチとして教員チームにテコ入れをしてくれる事になつたからである。仕掛人はやはり川崎先生だつた。笠原監督は春休みや夏休みの長期休暇中はほとんどつきつきりで教員チームの指導をしてくれた。

私はこの機会に全身をリーダーにして笠原監督の理論を吸収しようとした。当時は、前にも述べたようにバスケットの情報が極めて少ない時代である。私たちにとつて笠原監督が指導する内容は全てが新鮮で感心する事ばかりだつた。

笠原監督の指導方法で感心したのは、理論を明確に説明する事だつた。説明の一つ一つが選手に「なるほど」と思わせるのである。また、指導を受けていて、プレイの一つ一つの用語がとても大切な事を知つた。今では誰もが知つているポジション・ビジョン・コミュニケーションのディフェンス3原則を初めて聞いた時には興奮して夜眠れなかつた。

こうして教員チームで練習をしながら、なんとなく思つていたりわからなくて困つていたりした事が一つまた一つと明確に整理されていった。まさに国体さまさまであり笠原監督さまさまであつた。私は思つた。「我流ではだめだ。無駄が多い。正しい理論を勉強しなければ」それからの私は笠原かぶれになつた。選手を指導するに当たつて、どんなに簡単な事でもなんとなくやらせたり、どうしてそうしなければならぬのかという理由を説明しないでやらせたりする事がなくなつた。自分で考えた事でも他人の真似であつても、「なぜ」という理由が説明出来ないという事は自分でもよくわかつていないという事だから必ずどこかで行き詰まると考えたからである。

私は急に目の前がパッと明るくなつたような気がした。バスケットの勉強方法がわかつたので、新しい知識を吸収するのはもちろん、それまでやつて来た事ももう一度理論的に考え直してみた。ところが思わぬ落とし穴があつた。バスケットの勉強をやり直したのはよかつたが、知らず知らずのうちに実践力の乏しい理屈屋になつていつているのを自分で気がつかなかつたのである。「バスケットの理論なら誰にも負けない」そんな自信に支えられてあれもこれもと選手に教え、一見華麗に見えるけれども内容の乏しいチームを創つている事にはまったく気がつかないでいた。

惜敗

勢いを得れば何もかもうまくいくものである。保護者の理解は深まり、新入部員はバスケット部へ殺到する。六〇人もの部員を抱えて「どうやって練習させようか」などという、ぜいたくな悩みを抱えながら充実した日々が続いていた。「うまくなつたなあ」口に出しては言わないが、選手のプレイを見ながら内心ではそう思つていた。いわゆる玄人好みのチームなのである。ボール扱いの正確さ、身体の扱いの巧みさ、ディフェンスの読みの深さ、どれをとつてみても中学生とは思えないプレイをするのであ

る。

中学生相手の練習試合では満足できず、高校生とも練習試合をしてもらったが県下のベスト四ぐらいのチームに互角以上の戦いが出来た。私は、「今度こそ北九州大会で優勝出来るぞ」と思った。だが、小倉で行われた北九州大会では地元の規定中に決勝戦で敗れた。八点差だった。

この大会の前、主将の白浜が高熱で寝込んだ。白浜は七月にカゼをこじらせて肺炎になった。だから県大会には出場していない。八月になってようやく回復したものの、病床を離れて3日目がこの試合だった。本当は北九州大会に出場させるのは無理だと思っていた。しかし、最後の試合なのでみんなと一緒に連れて行ったのであった。

心の中で私は、「白浜さえ元気だったら勝てたかもしれない」という言い訳をしていた。だから、素直に自分のチームの欠陥を反省する気持ちに欠けていた。試合後、この試合を見に来ていた飯塚女子高校の本多監督が同じく桜馬場中の応援に駆けつけていた中村監督に言った。

「桜馬場中はうまいね。だけど、中学生のチームとしては私は規田中の方が好きだね」

私はこの、「中学生としては…」ということばが嫌いだった。本多監督に限らずいろんな人がそう言う。そのことばに続くのは、「もっと単純で簡単なプレイでいいのに…」というような意味のことばである。私はそれに「教えればうまくなるものを、わざわざ『中学生にはここまでいい』と決めつけるのはおかしい」と、反発していた。この、「中学生としては…」ということばには重大な意味が込められているのであるが、自信過剰になっていた私はそれを理解しようとせず、再び同じ過ちを繰り返すのである。

五 辟西一五年目

鶴鳴シリーズ

昭和四四年のチームは前述の白浜が主将を務めたチームである。翌年のチームは萬木（もろき）が主将だった。この二年間は私が桜馬場中に赴任して以来最強のチームであった。白浜たちのチームは、白浜の病気で（と想っていた）惜しくも北九州大会二位だった。だから、萬木たちのチームは絶対に優勝するつもりで張り切っていた。

当時、鶴鳴とは何回も練習試合をさせてもらっていたが、鶴鳴との練習試合はいつも公式戦以上に熱が入った。それは、中村監督が絶対に手を抜かないからだ。鶴鳴の下級生にとっても、桜馬場中との練習試合は将来レギュラーになれるかなれないかの登竜門とされていたから死にもの狂いで向かってきた。

何回もやった練習試合だったが一度も勝った事はない。というより中村監督が勝たせてくれないのである。もちろん、桜馬場中とやるときは下級生がスタメンである。しかし、交代要員で出てくる選手はだんだんレギュラーに近い選手になるのだ。普通、交代要員というのはスタメンよりレベルが下がるものだが、桜馬場中相手の鶴鳴はそれが反対になる。そして、桜馬場中が善戦すればするほど交代要員のレベルが上がってくるのである。

ところがこの五月に行なった鶴鳴との三連戦は歴史に残る練習試合となった。土曜日と日曜日の二日間三試合やってもらったが、一日目の土曜日、初めて鶴鳴の下級生に勝った。しかし、この時は中村監督がリクルートに出かけていて上級生がベンチコーチをやったので初勝利といってもあまり価値がない。

二日目。中村監督が帰って来た。すると選手の動きがまるで違って来る。前日の試合で鶴鳴の選手が手を抜いていたわけではないが、バスケットボールというのは非常にむずかしい競技だから、ベンチからの指図でコート上の選手の動きはまるで違ったものになるのである。午前中の試合は昨日のうつぶんを晴らすとする鶴鳴の下級生の気迫に圧倒されて負けた。これで一勝一敗。午後の試合がいよいよ決戦である。

午後の試合は白熱した試合となった。コート上の選手だけでなく、ベンチにいる選手たちも中村監督も私も、公式戦の決勝を戦っているような気分だった。

試合の勝敗は最後までわからなかった。桜馬場中が一ゴールリードし、それを鶴鳴が追うという場面が後半の中頃から続いていた。終了二分钟前、桜馬場中が一ゴール追加して差は四点になった。しかし勝負はまだわからない。次の攻撃で鶴鳴が一ゴール返せば差はまた二点になる。双方にとって次の攻防は非常に大切だ。次の瞬間、アツと驚くようなプレイが起こった。ボールが成った後、ディフェンスに戻ると見せてその場に残っていた田川が鶴鳴の選手がスローインするボールをスパーツとカットしてそのボールをノーマークでゴールしたのである。二点差になるかもしれないところが六点差になった。

「早く時間が過ぎてしまえー早く！」二分間が一〇分間に感じられるくらい長かったが遂に試合終了の笛がなった。「やったーっ」私はベンチから跳び上がり、選手たちは抱き合って喜んだ。あいさつが終わって私の前に集った選手の目には涙が光っていた。

「美しい」私はそう思った。何のタイトルもかかっていない練習試合にこれほどまでに真剣になれる選手たちの顔がまぶしかった。公式戦で桜馬場中を初めて優勝に導いた時よりも感動した。試合後、「強いね。今度こそ本物だね」と、中村監督から言われた。そのことはも私たちの感激を数倍大きなものにしてくれた。

まぼろしの名チーム

「君ねえ、物事を教えるには時期というものがあるんだよ」

会えば必ず川崎先生から言われたことばである。川崎先生は桜馬場中のチームを見るたびに中学生らしさが無いと言った。「確かにつまい。しかし、あらゆるプレイが出来るという事が逆に心配だ。君はいろんな事を教え過ぎてるよ」川崎先生は、今教えるべき事を後に延ばすとなかなか身につかないし、教える時期を早まると、その時はすばらしい出来ばえでも後になって伸び悩むものだと言っていた。そして、私に対しては特に後者の方を強調していた。川崎先生はそれを「早教育の欠陥」ということばで表現していた。

私は、この助言に承服できなかった。前の年の北九州大会で飯塚女子高校の本多監督が言った事も同じようなものだ。一方で「つまい」と誉めておきながら他方で「……らしくない」とけなしている矛盾が納得できないのである。中学生というのはつまくなるのはほどほどにしておいて多少幼稚さが残っていた方がいいというのか？そんなばかげた話はない。教えればつまくなるものをわざわざ控えるというのはもつたないじゃないか。

しかし、その指摘は見事に的中した。鶴鳴の下級生に初めて勝ち、中村監督から「強いね。今度こそ本物だね」と言われ、絶対の自信をもって臨んだ北九州大会だったが準決勝であっけなく負けた。相手はまたしても福岡代表の規田中だった。単純な二対二のスクリーンプレイにやられた。そんなプレイはとづくにマスターしているはずなのにやられた。「おかしい」「こんなはずはない」「そう思いながら何ら手を打つ事なくズルズルと負けてしまった。

試合が終わった後、私はしばらく茫然としていた。頭の中は真っ白で何も考える力がなかった。ただロビーにたたずむ私の足下から、今まで築き上げてきたバスケットが音を立てて崩れ落ちていくのだけははっきりとわかった。こうして、私の最高傑作チームは遂にまぼろしの名チームのまま終わったのである。

それから二〇年経った今、私は長年の経験から次のように考えている。まず、多くの人が『中学生らしいチーム』というそのことばがどのような意味で使われているのか、私には未だによくわからない。もしそれが、『中学生には教えなくてもよい事がある』という意味を多く含んでいるのなら、それについては私はノーという。教えたらうまくなるのなら何でも教える事だ。教えていけない事はない

私が注目したのは、訓練した内容が身につくまでの期間の問題である。私がまぼろしの名チームを負けさせてしまったのは、その事について私が勉強不足だったからなのだと思っている。私がいけなかったのは、決して教え過ぎた事ではなく、教えた事を後から復習させなかった事である。教え過ぎると復習する時間がなくなる。だから、結果的には教え過ぎる事が伸び悩みの原因になる場合が多い。しかし、復習させる時間を減らしてはならないという事と単純な事しか教えなくてよいという事とは決して同じ事ではない。

技術というのはだいたい一ヶ月あれば、ある一つの技術が『出来る』と評価されるレベルにまでは到達する。しかし、その技術が本当に試合で使えるようになるまでには、『練習 試し 復習 試し 練習』を繰り返さなければならぬ。その繰り返しは最低何回ぐらい必要なのかというのはその技術によって違う。だが、どんな簡単な技術でも、『練習 試し』を一回だけでよいというものはない。

二〇年前の私は、練習した技術を反復させる期間を惜しんで、次の段階へ急ぐ事ばかりを考えていたのである。選手は新しく教えてもらった事を覚えようとして一生懸命練習する。すると、前に教えてもらって覚えたはずの技術は忘れかける。復習をする時間を与えなかったせに私は、『俺は教えた。そしてちゃんと出来るようになった。それが出来なくなったというのはおまえたちがいいかげんな気持でやっていたからだ』と、選手にいいがかりをつけるのだ。

コーチをしていると新しい事を教えている時がもっともおもしろい。自分が主役になれるからだ。復習になると、一度出来るようになった事をもう一度やるのだからコーチはじつと見ているだけだという場面が多くなる。それが退屈なのである。それでつい先を急ぐ。

まぼろしの名チームが勝てなかったのにはもう一つ理由がある。それは、画一的に教えていた事である。センターが身につけて欲しい技術はガード陣にはさほど重要ではないし、シューターには器用なドリブルを要求する必要はない。それなのに全員に同じような事を教えていたのである。

6 迷 (56年目)

未練

史上最強と思っていたチームがこのような結果に終わってしまったのはさすがにショックだった。しかし、練習はしなければならぬ。翌日からさっそく練習は始まった。だが、私の心の隅にはもやもやした思いがいつもわだかまっていた。

このままのやり方を続けていても同じ結果にしかならないだろうという考えは確かにあった。しかし一方では、それまでのやり方に対する未練も残っていた。それまでの事を振り返ってみて、どこかの段階で足踏みしたり行き詰まったりした思いがあれば未練も捨て切れたのであるが、当時は『教えた

出来た』で技術は身につくもので、『何回も後戻りして復習させる』事が大切だとはまったく気付いていなかったから、「出来るようになった選手たちがなぜ出来なくなってしまうのだろうか？」という疑問がどうしても私の頭の中に残っていたのである。

さらに、選手に対する私の気持の持ち方もよくなかった。新しいチームの選手たちに対しては、まほろしの名チームの選手たちほどに思い入れもなく、私の気持はどちらかと言えば冷めていた。確かに、新チームの二年生には身体的な素質はあるが口が重く意思表示がはつきり出来ない選手が多かったし、一年生は身体的な素質もなければ性格的にもしゃきつとしたのがいないという状況ではあった。しかし、私の気持が冷めていたのは、そのような選手側からの要素ではなく、上級生に対してあまりにも思い入れが強かったための反動であった。

後々になってこうして若いコーチたちに「溺愛にならないようにしろよ」とか、「がむしゃら一本槍じゃすぐにダメになるよ」などと先輩づらして言えるようになったけれども、当時の私はこのように自分がまったく見えていなくて、自分がやってきた事に対する過信と仲良しだった三年生たちへの溺愛から抜け切れず、いたずらに日々を過ごしていたのである。

コーチがこのような気持でやっていてチームが強くなるわけがない。一九九一年の東ドイツやソビエトではないけれど、桜馬場中バスケットの崩壊は刻々と近づいていた。

新人戦

私の気持は前述のように中途半端だったが、練習に対して不熱心になったわけではない。だから当然県内では相変わらず圧倒的に強い。練習試合しても相変わらず負けなしだ。しかし、前年のチームと違ってこのチームの采配には少々強引なところがあった。前年のチームはほとんどノーマルのマンツーマンディフェンスで通したのに、このチームにはオールコートゾーンプレスがまた多くなってきたのである。

今思ってみると、自分のバスケットを肯定させようとして、無理やり大差がつく試合に持ち込もうとしていたのではないかという気さえする。大差をつけて勝つ事によって、「俺のバスケットのどこが間違っているというんだ」と、他人にも主張したいし自分にも言い聞かせたかったのではないか。もしそうだとしたら私は大変な過ちを二重に犯していた事になる。

後に第四章で述べる事になるが、オールコートゾーンプレスをチームの武器にして、「ディフェンスをがんばって、走るチームにしたいんだ」などというのは「ハーフコートオフェンスは苦手なんだ」という気持の裏返しでしかないのである。だから、そんな事で大差をつけて勝っていたとしてもそれほどこかで破綻がくるものだ。

当時、市内の新人戦は三月に行われていたが、まだ各チームとも未熟な段階での試合なので強そうだなと思われるチームでもゾーンプレスをやられると引つ掛かってしまうという場合がある。だから新人戦では桜馬場中の弱点は暴露されなかった。

二回戦ぐらまではまるで勝負にならない。そのころ、長崎市のベスト四はそのまま県大会のベスト四になるくらい長崎市のレベルは上がっていたが、そのベスト四のチームでさえ準決勝の江平中や決勝の附属中ともに二〇点以上の差をつけられて桜馬場中には負けている。

大番狂わせ

さて、前年の北九州大会で負けて以来、気持の整理がつかないままやってきたツケを払わなければならない時がやってきた。それは、六月の長崎市中体連であった。

春の新人戦では優勝しているから桜馬場中学校は当然優勝候補の筆頭に上げられていた。当時、中体連の試合はシード制が確立されておらず、チーム関係者は組み合わせがどうなるかに非常に神経を使っていた。この時の一回戦は江平中学校だった。一回戦としては屈指の好カードで誰もが興味をもって試合を見ていた。しかし、その興味も江平中学校がどこまで健闘出来るかという興味であった。私自身もそう思っていた。

ところが、試合が始まってみると何やら怪しい雰囲気なのである。試合はずっとリードされていてなかなかこちらに主導権が移らない。ベンチで指揮をとっている私も今までになくうろたえていた。本当に困った時、それまでは「誰かがなんとかするはずだ」と思いながらベンチで様子を伺う事が出来たが、コートを走り回っている選手たちの顔を見ても、今年のチームには目で話し合える選手が一人もいなかったのである。というより、私が昨年の選手たちを懐かしんではかりいて、私と選手たちとの間の意思の疎通が欠けていたと言った方が正しい。

センターの上村はまぼろしの名チームでもスタメンで活躍しており、そのクイックネスはかなりのものを持っていた。通常そんな選手が一人でもいれば苦しい試合であってもなんとかなるものだが、互いに信頼関係を作り上げていなかった私たちは、互いにうろたえるばかりだった。さらによくなかったのは、市内の大会で負けるなどと思ってもいなかったから何の用意もしていなかった事だった。そのような状況の中、昭和四六年度の長崎市中体連一回戦は、主導権がこちらに移らないまま最後のピストルが鳴った。かくして、私は無一文になってしまった。

七 再 (絶七年目)

決意

ここまで落ちればもう怖いものはない。私はすべての事を改革しようと決心した。

中体連の一回戦で負けた翌日、私は新チームの選手たちを体育館に集めて話をした。と、こう言えば自らを深く反省し、決意を新たにして選手に話したように聞こえるが、今思い起こせばまだこの時点でも私は自分自身を深く反省してはいなかった。なぜなら、話の内容の大半が選手のふがいなさを攻撃するものだったからである。

それを二時間ぶつ通しでやった。その、二時間ぶつ通しという事一つ取ってみても私が本当に自分を省みていなかった事がわかる。だいたい、講演会のように原稿を作り筋道を立てて話すのでさえ一時間半が限度なのに、計画性のない話を二時間もぶつ通し続けられて選手がまともに聞けるわけがない。きつと同じ事をくどくどと話したに違いない。

暑い中、選手たちは身じろぎもしないで直立不動のまま私の話を聞いている。すると当然脳貧血で倒れる者が出てくる。それをまったく無視して私は話を続けた。その気持の奥底には、「俺は妥協を許さないコーチなんだ」といううぬぼれと、自己陶醉があった。

話す内容についてはあらかじめ決めてはいた。一つは練習のやり方に関する事だった。それは問題なかった。しかし、組織上の事で話そうとしていた事は不安だった。その、組織上の事というのは新しい主将を一年生の門岡に指名するという事だった。

自分も育てようとしなかったせに、身体的な素質もなく性格的にもしゃきつとした選手がいらない新

二年生を信頼していなかった私は、まず何よりも先に新しいチームとしての上級生たちの意識改革をしなければならぬと思っていたのである。そこで考えたのが、この方針だった。選手の気持ちになってみるとそれはひどい仕打ちである。「バカバカしくってやってられないわ」そう言ってやめてしまわれるのが怖かった。しかし、一度築き上げたものを壊して新しいものを創るには思い切った事をやらなければまた元に戻ってしまう。だから、怖かったけれども「これで憤慨して二年生がやる気を起こしてくればいい」と、まことに身勝手な願いを込めて新キャプテンを下級生の門岡に指名した。

しかし、自分は大きな事をしてあげてもいけないのに、「こんな仕打ちをされてもついてくるんだっから面倒見てやりましょう」などと横柄に構えても誰もついて来てはくれない。不安な予感的中した。翌朝、体育館に姿を現したのは十三人の一年生たちだけだった。

いくら素質がない上級生といえども上級生はやはり上級生だ。一年生だけではどう頑張っても勝てはしない。まず、今年の九州大会出場は無理だろう。だから、もしそれまでと違う何かを出したかったら残った一年生たちが上級生になる来年だ。私は十三人の一年生を前にして、「この子たちが来年どんなチームに育つのか。もし、このチームがダメだったら、もうコーチはやめよう」と思った。

復活

組織上の事で思い切った手を打った結果はこうして手痛い仕打ちとして私に帰ってきた。しかし、練習のやり方で変えた事はうまく行きそうだった。

練習のやり方で変えたのは、それまでやってきた、全員に多くの技術を次々に教えていくというやり方を変え、教える内容を少なくし、また一人ひとりに教え込む内容も区別した事だった。ガードはガードの、センターはセンターの、それぞれの持ち場に於けるプレイに卓越していれば、少々気になる弱点があっても目をつぶるといふ考えを徹底して貫く事にしたのである。

それが翌年の優勝につながり、結果的にはやり方を変えた事が成功したのだが、この時点では技術の定着と復習の回数の関係の重要性にはまだ気がついてはいなかった。結果的に、私の考えを貫ける事になったのは一年生だけしか残らなかったからでもあった。一年生だから多くの事を矢継ぎ早に詰め込んで教えても無駄だと思っから教える内容を少なくして繰り返し繰り返し反復させたのである。それがよかった。翌年六月の長崎市中体連では下級生だけのチームで優勝し、さらにひと月後の県大会でも優勝して九州大会の出場権を得たのである。

下級生ばかりだから、技術や戦術ではどうしても負ける。互角に渡りあえるのは『頑張る』事だけである。だから私はこの『頑張る』という事だけで勝負を挑んだ。『頑張る』ということばは抽象的だから具体的に説明しよう。

以前は、頑張ると言えばそれがディフェンスにつながり、ディフェンスで頑張ると言えばオールコートプレスに結びつけていた。しかしそれは、こちらに力があつて相手を粉碎したい時にしか出来ない事で、身体つきも華奢で技術も貧弱な下級生たちにそれを要求すれば負けを早めるだけだ。

そこで、これだけは頑張れと言つて教えたのがリバウンドボールとルーズボールの取り方であった。とりあえず、どちらにも所有のチャンスがあるボールを相手より多く所有する事が出来ればそれだけ勝利のチャンスが増えるではないか。ただ、「根性で取れ！」などと、頑張るといふ事を精神論で片付けようとするとうまくいかないから技術を教える。そのもっとも重要な技術がスクリーンアウトであった。

もう一つよかつた事は、私も選手たちも「これしかやっていない」と思っていたので、他の事は一切考えずにその事だけに集中出来た事だった。『これしか出来ない』という事は『これだけは強い』とい

う事でもあると、初めて私は気がついた。

さて、中体連。最初の難関は準決勝だった。相手はそれまで練習試合で一度も勝った事がない聖マリア学院中学校だった。この試合は終盤の勝負所で私の作戦が見事に当たって勝った。その作戦とは、残り三分を切って聖マリア中のシュートがリングの付け根にはさまってしまった時の処置だった。

スコアは僅差。この時点での一ゴールは双方にとって死活を決めるほど重要である。私はベンチで休ませていた中村と、控え選手ではあるがチーム随一の駿足の山田をコートに送り出した。中村なら絶対にジャンプボールは負けない。だから山田を走らせて確実に一点を取ろうと思ったのである。

作戦は絵に描いたように見事に決まった。中村がタップしたボールを田中が取って山田へパス。山田は追いつがるディフェンスを振り切って楽々とランニングシュートを決めたのである。微妙に揺れ動いていた試合の流れは、このプレイを境にして桜馬場中に傾いた。

勢いというものは恐ろしい。準決勝では常に相手に主導権を取られて苦しい試合だったのに、決勝の試合は実力ナンバーワンの附属中学校を相手に終始リードを保ったままの試合を進める事が出来たのである。

決勝戦の山場は後半の中頃に訪れた。ポイントゲッターの田中が四反則になったのである。桜馬場中がわずかにリードしていたが、ここで田中がベンチに引っ込めば逆転されるのに時間はかからない。しかし、残り時間の事を考えるとここで危険な賭けをする場面ではない。私は田中をベンチに引っ込め、替りに樋口を出した。樋口は体格には恵まれていたが田中や中村に比べて力が足りず、まだ公式戦では使った事がない選手だった。タイムアウトを取って私は言った。

「いいか、あわてるなよ。今考える事はこのままの点差で出来るだけ時間を引き伸ばす事だ。落ち着いてやるんだぞ」

私は田中が落ち着くまで、代役の樋口が一分でも二分でもいいから無難に時間を引き伸ばしてくれる事を祈ってベンチから送り出した。ところがその樋口が無難どころか大活躍してくれたのである。ディフェンスリバウンドは確実に取り、おまけにオフェンスリバウンドまで取ってリバウンドショットを一本決めてしまったのだ。これでチームはいつぺんに明るいムードになり、再び樋口と交替した田中は持ち前の力を発揮して堂々と優勝候補の附属中を押し切った。

樋口

ここで樋口の事については是非触れておきたい。

選手は十三名だから、スタメンに入る事が出来ない選手が八人いる。樋口もそのうちの一人で、センターの控え選手だった。樋口は体格には恵まれていたが田中や中村に比べたら不器用でどうしても力が落ちる。だから私は、樋口を田中や中村の交替要員としてしか使えないと見ていた。ある日私は樋口に言った。

「おまえはサチコやヨシコの交替要員だ。他の余分な事は一切しなくていいからリバウンドだけは誰にも負けない選手になれ。ただし、交替要員だから試合に出られても四―五分だぞ。だがな、フル出場する選手も五分しか出ない選手も、その重要性は私にとっては同じだ」

スポーツドラマの世界では、こんなセリフは涙を誘うし絵になる。しかし、現実には選手を傷つける以外の何物でもない。だが、樋口は黙々と練習した。下級生がいらないから田中や中村がシュート練習をする時はボール拾いをしてやらなければならぬ。自分の練習をする暇はほとんどないのである。

樋口は少しでも暇が出来たら一人でボールを投げ上げ、それをジャンプして取ったり、ボールをバツ

クボールドにぶつけて取ったりしてリバウンドの練習ばかりやっていた。その結果が、あの附属中学校との決勝戦での活躍につながったのである。

私は、樋口に言ったことは現実のものとなってとても嬉しかったし、樋口自身もきつと私と同じ気持ちで喜びと誇りを感じているだろうと思っていた。だが、樋口は三年生になる直前にやめた。私がどのように説得しても聞かなかった。たとえ五分しか出場しない選手であっても、「あの試合は私がチームを救った」という実績を現実にとっているのだから、樋口自身自分の役割の大切さと価値がわからないはずがない。しかし現実にごうしてやめてしまったという事は、「どっせ選手としてやるからには日の当たる道を歩いてみたい」という気持ちに打ち勝つ事が出来なかったのかもしれない。

卒業した選手や保護者からよく言われることばがある。

「先生には、バスケットだけでなく、人生において大切な事をいろいろ教えられました」

だが、そんなことばを使えるのはほとんどが現役時代に脚光を浴びた選手たちとその保護者たちである。私はこのことばを聞く度に思う。

「日の当たる道を歩いてきた選手からだけでなく、樋口のような選手からそう言われるコーチになりた
い」

九州大会

前の年から北九州大会はなくなり、規模が大きくなって九州大会となった。中学生の全国大会が開かれる事になり、その地区予選として九州大会が開催される事になったのである。その、記念すべき第一回大会である昨年の全国大会優勝チームは、あのまぼろしの名チームの夢を見事に打ち砕いた北九州代表の規田中学校だった。

学級対抗もどきの選手たちを前にして着任早々「北九州大会で優勝するんだ」と言って大風呂敷を広げ、行く行くは日本のチームを創りたいと思っ
てバスケットにすべてを打ち込み、「これは生涯の最高傑作チームになるだろう」と思っ
てチームを創ったところが見事にその天狗の鼻をへし折られ、その、鼻をへし折った相手は全国優勝、こちらは全国大会が開催されるようになった年は長崎市中体連の一回戦で負けたのである。

その時は、これ以上屈辱的な運命に会った人間がいるだろうかと思ひ、いたずらにしては度が過ぎていると思っ
て本気で神様を恨んだ。しかし、第二回全国
大会が開かれるこの年は、全員下級生ながら前述のごとく県大会で優勝し、九州大会へ駒を進める事が出来たのである。「ひょっとしたら微かに光がさして来たのかもしれない」と私は思っ
た。

九州大会は九州八県を三ブロックに分け、それぞれで予選リーグを行ない、各ブロックの一位が決勝リーグを行なっ
て二位までが全国大会の出場資格を得るとい
うシステムで行なわれていた。その予選リーグでは桜馬場中学校は大分・鹿児島・長崎の三チームで予選リーグを行なうブロックに組み込まれた。

上級生主体のチームばかりが集まった中で、桜馬場中学校は下級生だけのチームである。桜馬場中が勝てるチームがあるとは思っ
てもいない。ところが、桜馬場中は予選リーグの一試合目で当たった大分代表に勝っ
てしまったのである。勝った原因は、中村のアウトサイドシュートがよく入ったからだった。決してまぐれではなかった。それは、チームの武器として訓練を重ねてきたプレイだった。それがこの一ヶ月半の間に、相手のゾーンディフェンスを崩せるまでに上達していたのである。

九州大会のころは、リバウンドボールやル・ズボールを頑張るだけのチームから、攻撃のシステムに

おける個人個人の役割が明確になりつつある段階ではあった。しかしそれが公式戦でどの程度通用するものか私にはわからなかった。だから予選リーグの一勝は、その見通しが立つたという意味で実に大きかった。続く二試合目は負けたけれども激しいマンツーマンディフェンスで終始相手を追いかけ回し、善戦した。

九州代表になったのは、昨年全国優勝した北九州代表の規田中学校と桜馬場中が予選リーグで負けた鹿児島代表の川内北中だった。試合が終わった後で川内北中の平瀬監督から言われた。

「来年は絶対ですな」

予選リーグを戦って、私自身もチームの方向が見えてきたように思っていたから、平瀬監督から言われたことを何度も噛みしめ、今度こそ間違わないように育てようと思った。

八 全国優勝七十八年目

貧血

神様はいじわるだ。チームが強くなったと思つたら必ず何か事件を起こす。それを四苦八苦して乗り切ると、また次の事件を用意しているのである。最初の事件は中村の貧血だった。

私が中村の異常に気がついたのは二月に入ってからだった。冬休みの強化練習期間、特に精彩を欠いていた中村は年が明けて練習を再開した後もなかなか元気を回復しなかった。はじめ、私は疲労が抜け切れないでいるのだらうと思っていた。しかし、どうも様子がおかしいので大病院の血液専門外来を受診させた。血液を専門に扱うところは原研内科といって、そこに私の同級生の朝長氏がいた。その朝長氏は、長崎大学時代に共にバスケットをした仲間であったが、この中村の診察を依頼したのをきっかけにその後半永久的にお世話になる事になる。

朝長氏に調べてもらった結果、中村の貧血は重症だった。ヘモグロビンの量は女性の平均値の半分以下であった。精彩がないはずだ。これでは運動どころか日常生活でさえ苦しかったであろう。朝長氏は中村を一ヶ月間休養させるようにと私に言った。目の前に新人戦を控えていて、これから一ヶ月間練習が出来ないのは痛い。困り切った私の気持を察して朝長氏は説明してくれた。

「心配しないでいいよ。必ずよくなるから。運動性貧血と言ってね、思春期の女性の運動選手には特に多いんだ」

私はさつそく本屋へ行き、血液専門の医学書を買って勉強を始めた。勉強を始めると私はそれまでやってきた事が恐ろしくなった。専門的な知識は知らなくてもほんのちよつとした知識があれば中村の貧血はもつと早く発見出来ていたのである。

その本によれば、顔色、ツメ、目、動作、そのどれをとってみても二ヶ月前から中村には貧血の兆候が表れていた。私にそれを発見する力がなかったために二ヶ月もの間中村は苦しんでいたのである。しかし、少し手遅れにはなったがこつして知識を得た私は、中村を一ヶ月間完全休養させる事にはまったく抵抗を感じなかった。

中村を休ませている間に市内の新人戦が行われた。桜馬場中は昨年、上級生がみんなやめてしまつて今のメンバーは昨年からそのままスタメンでやっている選手だし、昨年も下級生ながら市も県も優勝している選手たちだから長崎で負けるような事はない。と、思っていたがやはり中村の抜けた穴は大きい。優勝はしたけれど、決勝戦は梅香崎中に粘られてやつと五点差で逃げ切った苦しい試合だった。しかし、ともあれ優勝だ。そして一ヶ月が過ぎた。

「少しずつ始めてみるか」そう言って軽い練習を始めた最初の日、「あ、サチコのほっぺたが赤くなつた」誰かが思わずそう言った。これ以上の表現はない。一ヶ月前までは、ほんの少し走らせただけで真っ青になり、まるで死人のような表情になっていた中村だった。誰かのこの驚きの声は、みんなの動きをパタツと止めた。そして次の瞬間、「ほんとだーっ」という数人の声とともにみんなの表情もパーッと明るくなり、それまでのもやもやが一変にどこかへ飛んで行ってしまったような気分になった。みんながワイワイ騒ぐ中で、無口な中村の恥かしそうできて嬉しさを隠せない表情が印象的だった。

職人

中村が回復してからチームは目に見えて強くなっていった。例年と違うのは、一人ひとりが自分の持ち場におけるスペシャリストであるという事だった。

例えば、センターの田中や中村はドリブルの技術はまったくダメだ。しかし、二人ともポストでのピポットプレイには卓越しており、二人のコンビプレイは絶妙だった。

一方、ポイントガードの吉田は、ドリブルにかけては他の追隨を許さない。二人がかりでつかまえようとしても、平気で敵のプレスディフェンスを破っていくスピードがあった。

セカンドガードの山下は、同じガードでも吉田とはタイプが違う。身体が小さいから自分から強引に攻め込もうとはしない。ドリブルはのりくらりとしてなかなかつかまらず、相手をイライラさせる。そして彼女はパスが実にうまい。相手をよく見ているのだ。

小森は一風変わっていた。何でも出来る。ガード陣がもたついていれば、いつの間にかボール運びに参加しているし、相手の選手が必死に田中や中村をマークすれば、その裏についてスルスルとゴール下に入り込んで点を取ってくる。つかみどころのない選手だが、これが他の四人のキラキラした個性の中にうまく溶け合っていて微妙なバランスを保っているのである。

それぞれの、自分の持ち場におけるプライドがまた高い。だからしばしば味方同志でも衝突がある。田中にパスを入れる時はガードは神経を使う。田中がせっかかないポジションを取ったのにパスが悪かったら、「遅いー」と、厳しい注文がとぶのだ。

相手にプレスディフェンスをされた時のボール運びがまたおもしろい。ボール運びに参加しようとしてセンターが跳び出してくると、ガードの吉田が「邪魔ななめの時は、「邪魔！」と言って、鬼のような形相をして相手を抜き去って行く。

このように、互いの意地の突っ張り合いというのはほとんど毎日あったが、これが大事な勝負がかかった公式戦だと誰もが自分を殺した。強情な田中でさえ、ガードからのパスが少々悪くても、「大丈夫、次は絶対取るから思いきり投げて」と味方を励ますのである。生きるか死ぬかという時には自分を殺してチームを最優先に考える。そんな選手たちの集まりであった。

練習相手

スクリメージをたくさんやった。というより、スクリメージと部分練習の繰り返しだったという方が当たっているかもしれない。スクリメージの相手をしてくれたのは男子のチームだった。この年の男子のチームは県下でもベスト四に入るチームだった。だからもちろん勝てっこない。何度やっても勝てない相手にこれでもかこれでもかとぶつかっていくのである。

しかし、何度やっても勝てない相手だからといって、「仕方がない、相手は男だもの」というような

顔をする選手はいない。特に、意地っ張りの吉田と田中は負ける度に悔し涙を流した。こんな気質を持った選手たちが強くないはずがない。もっとも激しかったのが彼女たちが二年生の時の冬休みの練習だった。

終業式の日から大晦日まで約一週間、午前と午後の二部練習をした。昼食はそれぞれの保護者が暮れの忙しい時期にもかかわらず、学校の家庭科室を借りて当番制でつくってくれた。練習は男子チーム相手の試合だけだ。それもフルゲームではなく、一〇分のセティングゲームを何度も繰り返した。始めはまったく手も足も出なかったが、三日目を過ぎたあたりから一日に一回か二回は互角の勝負が出来るようになった。一〇分間という短い時間の勝負だから粘っていればチャンスが訪れるのである。フルゲームであれば一回や二回のミスは取り返せるが、一〇分という短い時間での勝負では一回のミスが命取りになる事があるのだ。相手のそういうミスを大切にした。

そうなるも男子も怒って本気になってくる。こんな事があった。リバウンドボールを奪い合ってセンターの田中と男子チームのキャプテンの山下が激しく争った。どちらもボールを放さないからヘルドボールだ。しかし田中は審判の笛が鳴ってもスッポンのようにボールに食らいついて放さない。その田中のしつこさにカツとなった山下がボールを振り回して腰を捻った。

ドテーン。柔道の試合なら払い腰で一本決まりというところだ。田中は見事に放り投げられた。その後のジャンプボールがおもしろかった。サークルに立った二人は一触即発の形相をしている。「これは何か起こるな」と思った直後、審判のトスアップでジャンプした田中の肘が山下の顔面を直撃した。それで貸し借りなしだ。それを見ながら私はにやにやしていた。

ともあれ男子は毎日毎日真剣に女子の相手をしてくれた。全国優勝を果たした彼女たちの功績の半分はこの時の男子チームの協力によるものと言っても過言ではない。

仕上げ

三年前のまぼろしの名チームの時はあまりにもチームを早く創りあげてしまっただけで、この年は八月上旬の九州大会が終わるまでディフェンスにはほとんど手をつけずにやってきた。それは、狙いとする全国大会の直前まで、選手たちに「私たちにはまだやり残している事がある」という焦りを感じさせようと思ったからだ。た。

仕事にしても試合にしても受験にしても、早々と準備を仕上げてしまえば、狙いとする期日が迫ってくるにしたがって「大丈夫だろうか、やり残している事はないだろうか」と余計な事を考えてしまうものである。だから、狙いとする期日が来る直前まで、やらなければならない事を残しておくというのは邪念を払うという意味で重要な事なのである。

九州大会の準決勝までは群を抜く攻撃力で他を寄せつけずに圧勝してきた選手たちはまだ自分たちのディフェンスの弱さに気がついてはいなかった。ところが、圧勝する予定の決勝戦では北九州代表の引野中学校に危つく負けそうになったのである。だから九州大会で優勝はしたものの選手たちはあわてた。「これでは全国優勝はおぼつかない」と誰もが思った。だから九州大会直後から全国大会までの期間ディフェンスに的をしばった練習では選手たちの目の色が違った。焦りが集中力を生み出したのである。

よく、「うちの選手たちは集中力が続かなくて……」ということばをあちこちのコーチから聞く事があ。それはおそろく、選手自身の問題ではなくコーチにも問題があるのではないかと私は思う。

誰しも、これからやることとする事が具体的に理解できていて、その必要性を認識しているのならば真剣に取り組むはずである。その、具体性と必要性をいかに選手の意識の中に植え付けるかがコーチの能

力であつて、それを植え付けずして選手の集中力のなさを責める事はできない。

桜馬場中学校の選手たちは九州大会において一対一のディフェンスが弱い事を具体的に知った。そして、ディフェンスの強化の必要性を強く認識した。だから、ディフェンスの練習に目の色を変えて取り組んだのである。

私は、ここで具体性とか必要性といふことばを使っているが、その当時から明確にそれがわかっていなければいけない。その当時は、「返って少しぐらい焦りがある方が真剣になるんじゃないかな」「ぐらいのぼんやりした考えでやった事である。

しかし、九州大会が終わってから全国大会までの約三週間で見違えるように進歩したディフェンス力を、「なぜなんだろっ?」「何がよかったんだろっ?」「と考えているうちに、具体性とか必要性とか焦りといふことばを私は発見した。この事は、以後の私のチーム創りの基本的な考えになっている。

隔日一時間半

全国大会は八月の中旬過ぎに行なわれる。九州大会から約三週間後だ。その三週間の練習は一日おきにしかしなかった。しかも一日の練習は一時間半で終わった。

練習内容は大半がディフェンスの練習である。それも、練習の出来がよくても悪くても一時間半でピタツとやめる。終わってから個人練習をするのは一切禁止だ。猛暑の中での練習だから翌日まで疲労を残さないようにするためである。

過去の実績からして九州は全国的にもレベルが高い地区だ。だから九州大会に続いて全国大会でも優勝したいと思っていた。そう思っていないながら練習時間を減らすのである。本音を言えば多少不安ではあった。「もう少し練習した方がいいかな」とも思ったが、過去のチーム創りで、この「もう少し……」で何度も失敗している。それが強く心に残っているから思い切つてこの方針を押し通した。

私は溺愛タイプのコーチである。しかし、このころの私は、溺愛から脱皮しなければならぬと自分に言い聞かせていた。だから、選手の顔を見ない日は寂しかったが練習時間の一時間半以外は一切選手の顔を見ないようにした。遊びに連れていく事もなく電話をかける事もない。一日おきの休みの日には選手がどんな生活をしているのかも知らなかった。

練習は、一通りの事をやり遂げたのであとはコンディションを整えるだけだといふものではなく、ディフェンスの課題が山ほど残っている。選手も九州大会でこの事はよくわかつているから一時間半の練習は真剣だ。そして、私が何も言わなくても練習の出来がよいのか悪いのかがわかる選手たちばかりだったから、私が注意してやるのは選手たちだけではわからない技術のポイントだけで、精神面の事で注意しなければならぬような場面はまったく無かった。

情報集め

全国大会の組み合わせが決まり、一回戦の相手が東京代表の三鷹第二中学校だといふ事がわかった。うわさでは、同じ東京代表の大妻中学校が全国大会の優勝候補の筆頭だと聞いている。三鷹第二中は東京都の予選でその大妻中を破つて東京一位推薦での出場なのである。

私はあらゆる手段を使って三鷹第二中の情報を集めた。情報によると三鷹第二中のフォワードにすばらしい選手がいるといふ事がわかった。その選手が三鷹第二中の得点の大半をたたき出しているらしい。この選手をなんとかしなければならぬのである。私は考えた。

大妻中学校を破ったチームのポイントゲッターだからかなりすごい選手に違いない。桜馬場中でもっともディフェンスが強いのは山下貴恵子だ。しかし、彼女は六番目の選手である。もし三鷹戦に彼女をスタメンで起用するならば誰かを替りにスタメンから降ろさなければならぬ。するとオフェンスのバランスが崩れる。山下をスタメンに入れてディフェンスが強化されるプラス要素とそのためマイナス要素を考えた場合、山下をスタメンでは起用できない。スタメンの中で三鷹第二中のエースを守れそうなのは吉田だが、ポイントガードの彼女にはディフェンスで負担をかけさせたくない。私はあれこれ考えたあげく、小森に三鷹第二中のエースをマークさせる事にした。

小森にした理由はこうだった。三鷹第二中のエースはかなり能力がありそうだからどの選手でマークさせてもやられるかもしれない。それならディフェンスの強い選手でマークさせてもディフェンスの弱い選手でマークさせても同じ事だ。小森はスタミナがある。ディフェンスは強くないが、やられてもくさる性格ではない。強烈なプレッシャーをかけたりスティールを狙ったりしなくてもいいから、一試合中ベタベタベタくっついてまわっていたら相手のエースも嫌になってリズムが狂ってしまうのではないか。

この考えは大当たりだった。やられても他の四人がヘルプしてくれるし、小森は決して感情的にならない選手だから無茶なファウルもしないし、終始相手にベタベタベタくっついてまわる。前半はリードされて折り返したが、後半に入り小森のしつこさに嫌気がさしたのか三鷹第二中のエースが棒立ちになるケースが次第に目立ち始めた。こうなればしめたものだ。

初めての全国大会で、しかも予選で本命を破っている強豪チームに当たり、そのチームに後半の途中で勝ちが見えた試合が出来たのはその後の試合に非常に重要な影響をもたらした。

味方まで欺く

試合に勝つためには敵も情報を探ってくるのだから、探られないようにするのも大切な事だ。私は味方まで欺いた。内心では優勝を狙っていても決して口には出さない。選手にもその事は徹底させた。少しでも、「長崎の桜馬場中学校というチームが今年は強いらしいよ」といううわさが立てば情報を探りに来られるだろうし、それだけ不利になるからだ。

特に川崎先生にはこっこの情報は絶対に伝えなかった。川崎先生は自分の傘の下にいる者を可愛がり過ぎる癖がある。自分の息のかかった選手や教え子に何かいい事があると手放して喜び、黙ってはいらなくなるのである。私が不用意に「今年は優勝を狙えるかもしれませんよ」などと洩らせば、もう黙ってはいられずに誰かに話すだろう。そうなるとバスケット界ではあちこちに知り合いが多い川崎先生だ。「今年の桜馬場中は強いらしい」といううわさがアッと一瞬間に全国に広がるに違いない。

当時は今のようにビデオもないし、また合宿や遠征といっても県内止まりが主流で県外との交流が非常に少ない時代だったので、特に情報の収集と洩れには気を使わなければならなかったのである。

困った事が一つだけあった。この年、三重県の津で開かれたインターハイで鶴鳴は四位だった。この時各報道機関から取材を受けた中村監督が、「今年、俺んところはこんな成績で不本意だったけれど、長崎からは中学校でひよっとしたら全国優勝するチームが出るかもしれないよ。桜馬場中学校といったら強いんだ。なにしろ俺んところが一勝二敗で負け越しているんだから」と、言ってしまったのである。中村監督は、自分のチームが不本意な成績だったし自分のチームの事にはあまり触れられなくなかったので矛先を変えようと思って多少オーバーに吹聴したに違いない。

「え？ このチームがですか？」

「もちろん、そうさ」

いくら強いといっても、中学生が日本のトップレベルの高校のレギュラー選手に太刀打ち出来るわけがない。確かに勝ったけれどもそれは下級生相手の練習試合であった。これを真に受けて、東京に着いたら真剣に取材にきた報道機関があった。私は笑いとばして中村監督の話を訂正し、下級生相手に勝っただけだと言い、決して優勝を狙っている事など喋らなかつた。

二つの事件

これだけ用意周到に進めてきたにもかかわらず事件が起こった。

一つは、ガードの山下好美が長崎を出発する直前に中耳炎になつた事だつた。出発の前々日から高熱が続ぎ、東京に着いてから最初にしなければならなかつたのは練習会場の心配でもなく、宿舎の部屋割りの事でもなく、山下の中耳炎の治療のための病院を探す事だつた。

山下は、仲間に迷惑をかけまいとして痛そうな表情や苦しそうな表情はしない。が、なんとなく元気がないし動きにも精彩がない。一回戦の山下はなんとか持ちこたえたが、二回戦から準決勝まではほんの少し出場してはすぐ山下貴恵子と交替し、また少し出ては交替するという繰り返しで、ほとんど活躍出来なかつた。だが、山下にも「この日のために練習してきたんだ」という意地がある。決勝戦では、それまで代役を務めてきた山下貴恵子に替って、パスにドリブルにようやく彼女らしさを発揮する事ができ、なんとか面目を保つた。

もう一つの事件はセンターの中村の発熱と下痢だつた。二回戦が終わつた夕方の事である。キャプテンの門岡が「サチコが具合が悪そうにしています」と私に報告した。私は急いで中村を近くの病院へかつき込んだ。医師の診断では極度の疲労と緊張が原因の発熱と下痢だという。

中村はその日、ブドウ糖注射だけで夕食はとらなかつた。翌日の試合は最大の難関である大妻中との対戦である。常識的には、こんな中村を試合に出場させる事は出来ない。だが、大妻中との試合に中村が出場しなければ絶対に勝つ見込みはない。それは中村自身もわかっている。だから、中村は翌朝起きてから会場に到着するまで、「私は試合に出してもらえますか？」というよつな目で私を見ない。当然出場するのだという気持でいる。

「中村が倒れたら救急車の世話になるしかない」そう覚悟を決め、私は中村を試合に出す事にした。中村は頑張つた。類はこけ、息をするのも苦しうだつたがフル出場だつた。得点はわずかに六点。いつもの中村の半分ぐらいしか活躍出来なかつた。しかし私は、中村の試合ぶりを見ていて、執念が創りだす人間のエネルギーのものすごさをつくづく感じた。

救世主

勝つ時は運も強い。こんな困つた時に救世主が現れた。山下貴恵子は脚力があり、男まさりのジャンプシュットを持つていたがドリブルが不得手だつたのでどうしてもスタメンで起用する事が出来ない選手だつた。この山下貴恵子が大会期間中に中耳炎で苦しんだ山下好美の穴を埋めて大活躍したのである。守つては強い脚力で相手のキープレイヤーを封じ、攻めては得意のジャンプシュットでピンチの桜馬場中を救つてくれた。特に、準決勝の大妻中戦で山下が決めた二本のジャンプシュットは今でもはっきりと思ひ出す事が出来る。

大妻中のディフェンスは二―二のゾーンディフェンスだつた。攻め方は指示してあつたものの、

今までに対戦した事のない大型選手たちを目の前にと選手たちは心理的な圧迫を受けてなかなか作戦通りの攻撃ができない。攻め方の感じをつかめないまま時間はズルズルと過ぎていくばかりだ。こうした試合は、たとえ点差を開けられずにしばらくの間ついていったとしても負けパターンの試合である。私は打つ手に窮して、「優勝を狙って来たけど準決勝で終わりなのかなあ」と思いながら試合の成り行きを見守っていた。

と、その時である。ハイポストの中村から出されたパスを受けた山下が、左サイドから鮮やかにジャンプシュットを決めたのである。その一本は、試合の流れがもうあととはほとんど大妻中に差をつけられていくばかりだという場面だったので、後半に望みをつなく起死回生のジャンプシュットであった。

決着をつける時期を逸した大妻中は後半に入って攻撃がちくはくになり、もたついてきた。逆に息を吹き返した桜馬場中はジリジリと追い上げ、遂に後半の中頃に逆転した。しかしまだまだ試合を決定づける点差ではないし、完全に桜馬場中が主導権を取ったと言えるようなペースでもない。

試合はそのまま終盤までもつれ込み、残り二分代になったところで大妻中が差を四点から二点に詰める絶好のチャンスのノーマークシュットを落としてアウトオブバウンズになった。桜馬場中のボールでスローイン。この攻撃こそが双方の運命を分ける決定的な場面である。そこでまた山下が左コーナートップのところに鮮やかな一発を決めたのである。それで勝負が決まった。山下貴恵子はまさに、桜馬場中の救世主であった。

大試合での作戦

決勝戦の相手は埼玉県代表の志木中学校であった。長身選手はいないが粘り強いディフェンスと速攻を武器として勝ち上がってきたチームだ。強敵である。だが、どのチームにも弱点はある。志木中の弱点は外からのシュート力がない事だと私は見た。私は前夜のミーティングでその事を選手に理解させ、作戦を立てた。それは、外からのシュートは捨ててドライブインやステップインだけを徹底的に守るという作戦だった。作戦盤の上では完璧に近い作戦が出来上がったと私は思った。

ところが、試合が始まるとその作戦はどこへ行ってしまったのか、やられるはずがないドライブインですすい抜かれ、確実に優位であるはずのリバウンドボールまで取られるという有様でアツという間に桜庭場中は六ゴールリードされてしまったのである。

あわててタイムアウトを取ったが、私の前に集った選手たちは落ち着いて私の話を聞ける状態ではなかった。顔は真っ青、目は血走っているし、おそらく喉はカラカラなのだろう、つばを飲み込むのでさえもひっかかっている。完全にアガっているのである。

作戦を確認し、指示を与えようと思っていた私の考えは急きよ変更された。とにかくアガりを解いてやらなければならぬ。「オールコートプレスだ！ここまで来てこんな試合しか出来ないのなら今すぐ長崎に帰れ！」と、目の前の選手たちを大声で叱りとばし、再びコートに送り出した。選手たちはオールコートマンツーマンでボールを追いかけ回す。私も「行け！」「走れ！」と、選手をあおり立てる。

これは成功だった。無我夢中でボールを追いかけて回した選手たちは完全にアガリから解放された。「もう大丈夫だ。あとは借金を少しづつ返していけばいい」私は、めちゃくちゃに走り回り、疲れて肩で息をしている選手たちを見ながら彼女たちの疲れは気にならずにそんな事を思った。

試合は後半の残り三分で同点に追いついた。追いついてからはもうこっちのペースだ。勢いづいた桜馬場中とがっくり来た志木中の差はそのまま点差となって現われ、相手の五反則退場も手伝って、最後の三分間に予想以上の差がついて勝った。

身長差でこちらが優位だからリバウンドボールの奪い合いは負けるはずがないのに、前半はそのリバウンドボールの奪い合いで志木中に圧倒的に負けた。後半、足では志木中の方が一枚上手のはずなのに、その足で勝負するプレスディフェンスで逆転に成功した。皮肉なものである。大試合では小手先の作戦はあてにならない。気合いを制する事だ。作戦の緻密さ、用意周到さにつめばれていた私の大失敗であった。

胸上げ

勝利の後の胸上げの感激。そんなありふれた喜びを語りたいためにわざわざこの項を設けたのではない。同じ感激でも私はもっとすばらしい感激をその胸上げで味わった。

優勝した直後の胸上げというのは、選手がサーツと監督のそばにかけよってきて担ぎ上げるのが通例になっているが、私の身体は「ワーツ」と言って観客席からフロアになだれ込んできた男の子の集団によって担ぎ上げられた。選手たちはそれにつられて私の回りに集った。

真つ先に私の目に止まったのは大山だった。大山はその春、桜馬場中学校を卒業し、東京の高校に進学した生徒だった。大山が桜馬場中学校の生徒だったころ私も体育の授業を教えた。大山はサッカー部だった。私は大山に手をやいた事はなかったが、他のほとんどの教師が手をやいて扱いに困るほど中学時代の大山はワルだった。見ると、ドツと観客席からフロアになだれ込んで来た男の子の集団は、大山グループのワル仲間ばかりだった。

「なんだお前たち？」胸上げから解放された私は真つ先に大山に聞いた。

「今朝の新聞で、桜馬場中が決勝に残っていると知ったもんで……」

「いや、そうじゃなくて、どうしてお前たちがこうして大勢東京に集まっているのかと聞いてるんだ」それについては炭屋の息子の峯が答えた。

夏休みになったら一人だけ東京へ出て行ってしまった大山のもとへ中学時代のワル仲間が集まり、みんなで遊ぼうという計画を前々から立てていたらしい。代々木へかけつける前の日、彼等は大山の家で久々に逢い、中学時代の話に花が咲いたそうである。そしてその日に、翌日からキャンプか何かの小旅行に出かけようという相談がまとまった。ところが翌朝、即ち決勝戦当日の朝新聞を見ていた大山が、「おい、桜中が決勝戦まで行ったぞ」と言ったのが発端でその小旅行の計画はいっぺんに崩れてしまったのである。

「え、いつ？」

「きょうだ。きょう」

「キャンプやめやめ。代々木に行こ……代々木」

「よし」

それでももう決まり。大急ぎで代々木に駆けつけたというわけである。

私は感激した。そして、「学校ではどんなに鼻つまみ者にされていても、いやというほど殴られた先生と逢っても、異郷の地で母校の名を聞けば懐かしくなる。どんなワルでも、母校を思う気持は同じなのだ」そう思った。私は、久しぶりに逢った仲間との楽しいキャンプをキャンセルして代々木に応援に駆けつけてくれたワルたちの心の奥に潜むやさしさが嬉しくてたまらなかった。

食事が喉を通らず

長崎を出発したその日から、私は食事が喉を通らなかつた。どんなに小さな大会でも大会前になると決まってそうなる。緊張のためだ。そんな弱々しい監督を選手の前にさらすわけにはいかないので夕食の時はいつも苦労した。夕食は選手と一緒に食べるが、早々に引き上げて自室のトイレで吐く。どうしても食事が喉を通らない時は、「俺は外でつまいものを食ってくる」とかなんとか言っていてわざと威張って出かけ、近くの喫茶店でコーヒーでも飲んで喉を潤して帰る。

勝ち進んでいくにつれ、私は選手の一挙一動に敏感になり、「あいつのシユートが後半ポロポロ落ちたのが気になるなあ。疲れかなあ」とか、「ミーティングでは大丈夫だと言ったものの、本当にうまくいくかなあ」となどと悲観的な事はかり考える。

決勝戦の前夜は一睡もしなかつた。考えてもどうにもならない事はかりなのに、あれこれと考え過ぎて眠れないのである。それでも翌朝選手と顔を合わせたら、「お早よう。あーよく寝た。寝過ぎて目が腫れ上がったよ」と嘘をつく。何日もそんな生活を続けながら、「腹が減った」とか「眠い」とは感じない。頭だけはピンと冴えわたっているのである。

だから、試合が終わった途端に「やった、優勝だ！」という感激は湧くけれども、それは試合直後のほんのわずかの間であつて、その後からは「終わった、とにかく終わった」という安堵感の方が大きく膨れ上がってくる。そしてしばらくすると、猛烈な空腹感に見舞われるのである。それまで食事が喉を通らなかつたのが嘘のようだ。

優勝の後のブルーマウンテンの香りは格別だつた。

美香

話は少しさかのぼるが、中村が貧血で苦しんでいる頃と時を同じくして長女が誕生した。昭和四八年の一月一〇日だつた。出産予定は三月下旬だつたが切迫早産で二ヶ月半も早く産れた。正常出産ではなく、帝王切開だつた。切迫早産の原因は前置胎盤だつた。子宮の出口近くに着いた胎盤がこどもが大きくなるにつれて圧迫され、出血し始めたのだつた。深夜の大病院の産婦人科の廊下で私は医師に言われた。

「このままだと胎児の生命が危ないです。帝王切開で出していいですか？」

「よろしく願ひします」

私はその頃、中村の貧血に初めて気がつくくらいで医学的知識は無かつたし、誰に相談する暇もなく、そこで一人で結論を出さなければならぬ状態だつたので、何がどうなっているのかわけもわからず、そう答えるしかなかつた。

長女は一七三〇グラムの未熟児で産れた。今では医学が発達していて、産れた時は五〇〇グラム以下の未熟児であっても正常に発育する例は多い。しかし、長女が産れた状況は非常に危険だつた。後になつて聞いた事だが、無呼吸だつた時間がかなり長く、顔は酸欠によるチアノーゼで紫色になっていたといふ。

医師たちの懸命の処置でようやく産声をあげたが、その時すでに長女の身体には一生背負っていかなければならない障害が住みついてしまつていたのである。それは、長時間の酸欠状態による脳障害であつた。しかし、その事が発見され、訓練が開始されたのはずっと後になつてからだつた。

長女は美香と名づけた。産れた翌日、無菌室の保育器の中に入れられている長女と窓越しに対面させてもらったが、我が子と初めて対面した時、私は父親になつた感動とか幸福感というものは感じなかつた。保育器の中の長女の、私の人差し指よりも細いのではないだろうかと思われる腕、そして向こうが

透けて見えるような肌の色を見た時、「生きている！」と思った。それが正直な感想だった。命を感じた。命の尊さとか命の尊厳とか、そんな余分なことは付け足したくない命そのものを感じた。それが父親となった私の実感だった。

長女は三月に退院した。しかし、妻は入院したままだった。帝王切開した時に二四〇〇ccの輸血を受けたが、その時血清肝炎にかかったのだった。長女は妻の実家で預かってもらう事になった。しかし、二四時間ごもの世話をするのは祖母にとっても大変なので、昼間は保育園に預ける事にした。

私の生活は、朝自分のアパートを出て妻の実家に長女を迎えに行く。それから、長女を保育園に預けて出勤する。午後四時に長女を保育園に引き取りに行き、妻の実家に届ける。そしてまた学校へ戻りバスケットのコーチをする。夕方また妻の実家に寄り、長女を風呂に入れる。長女が寝た後自分のアパートに帰って仕事をすると、という繰り返しだった。そんな生活が、妻の血清肝炎が治って退院する六月まで続いた。

全国優勝を狙えそうなチームを持ちながら、その直前になってこんな生活をしなければならないのは非常に辛かった。しかし、保育器に入った長女の、生きようとする姿を見た瞬間から私はどんなに辛い事があっても耐えなければならぬと思った。

長女の様子がおかしいと最初に気づいたのは保育園の保母さんだった。おむつを替えてやる時にひどく股関節が堅いと思っただけ。「股関節脱臼の検査はなさいましたか？」と保母さんから言われた。未熟児だった長女は定期的に小児科で検診を受ける事を義務づけられていたし、何か異常があればその時発見されるはずなので、何も言われぬという事は何も無いはずだと思って、「ええ、やりました」と私は答えた。

医師団は、保育器で育てられた未熟児は酸素の調節を注意深くやらなければ未熟児網膜症になる危険性があるのでその事にもっとも気を配っていた。しかし、保育園の保母さんが気づいた事を医師団が気づくのに時間はかからなかった。付けられた病名は『脳性マヒによる体幹および下肢運動機能障害』だった。知能と視力はまったく正常だったのがせてもの救いだった。

しかし、長女はこれから一生そのハンディを背負って生きていかなければならない。私は、世間一般の父親が味わえるような、子どもの成長を楽しみに仕事に励むとか、子どもを将来オリンピック選手にする夢を描くとか、そんな感情よりも、「この子が将来、胸を張って世間を歩けるよう、立派に育て上げなければならぬ」という責任感の方を強く感じていた。

長女の病名がはつきりして訓練が開始されたのは八月だった。それにしても、日本一になって喜びの絶頂に上り詰めた一方で、長女の一生についての父親としての悲痛な覚悟を決めなければならないとは皮肉なものだった。「お子さん、お一人ですか」とよく言われるが、長女一人の事で精一杯。とても次のことをつくる気にはなれなかった。

九 バスケットを離れて九〇一年目

放心

昭和四八年の八月以降、私はしばらくの間燃え尽き症候群に襲われた。

「日本一になりたい、日本一になりたい」そう思いながら無我夢中でやってきた八年間。ようやくたどりついてみるとその先が何も見えなくなってしまったのである。「この先俺は何をすればいいのか？これから又今までのような苦しみを味わい続けるのか？」そう考えると、もう教師もバスケットもやりた

なくなつた。前年、中村監督が鶴鳴女子高校を率いて三冠王を取った時、「俺、もういいよ」と言った。その時は、「待ってくださいよ。私が勝つまで」そう言つて止めた。しかし、それから一年後、自分の思いを遂げてみると中村監督がそう言つた気持がよくわかる。九月になつた。

「俺ももういいよ」

「もういいな。これくらいで」

「うん」

「何か、会社作ろうか」

燃え尽き症候群で何も見えなくなっている私たちは無謀にもそんな相談をし始めた。その時中村監督は三三才、私が三才だつた。

そんな私たちの無謀な考えを支えてくれる人がいた。Ｙさんだつた。Ｙさんは、自分でもいくつかの会社を経営しており、スポーツ好きで少々無鉄砲だけれども頑張る若者が大好きな社長さんだつた。いろいろ考えたあげく、私たちはコンピューターの末端部門の業務を仕事にする会社を作る事にした。

当時、業界にはコンピューターが急速に浸透していきつつあつたところで、カード処理するためのキーパンチャーが引く手あまたの時代だつた。企業によっては、パンチ業務部門を韓国に依頼するような状況だつた。これから急速に伸びていくコンピュータ処理業務に目をつけ、私たちの構想はいよいよ具体的に進行し始めた。中村監督も私も、わずかな貯金をはたいて資本金を作つたがそれだけではとても足りない。Ｙさん始め、五人の方々に我々の計画を話し、資本金を出してもらつた。

それから、会社設立のための定款づくり、設立申請、貸しビル探し、人探し、機器のリース等々、毎日こまねずみのように走り回つた。普通ならばもつとも難しい人集めの問題がすんなりいつた。それは、実際に現在キーパンチャーとして他の会社で働いている中村監督の教え子たちが、勤めている会社を辞めてこつちに来てくれたからだつた。要するに引き抜きだ。

こうして、長崎パンチセンターという名で会社は設立された。しかし、公立の学校の教師の副業は認められていなかったので私は実際には仕事に携わらず、翌年の三月に退職した後で本格的に業務に携わる事にしていった。

しかし、その年の暮にあの第一次オイルショックが日本の経済界を襲つた。このオイルショックで、それまで高度成長に支えられて安穩に暮していた人々はパニックに陥つた。物が手に入らなくなるといふデマに踊らされ、燃料店は灯油を売り惜しみ、その結果灯油やガソリンの価格が急騰し、スーパーマーケットではトイレットペーパーを買い溜めしようとする主婦の行列ができた。

こうなると、我々のような若造の、しかも素人がやる事業などひとたまりもない。会社設立にあたり、仕事を回してもらえる約束をしていた会社から次々とキャンセルの連絡が舞い込んだ。会社設立以来二ヶ月足らずで事業は倒産の心配をしなければならなくなつた。二月のある日の夜遅く、中村監督が突然私の家に来た。

「おまえ、教員辞めるな。もう事業はだめだ」

「そつ…うん、わかつた」

それだけの短い会話で中村監督はそそくさと帰っていった。中村監督は、以前から鶴鳴高校は退職する事に決めていた。それでこの事業を始める事にしてしたが、共同石油からも監督就任の強い要請があつて迷つていた。何回かの話し合いで我々がたどり着いた結論は、「俺たち、結局バスケットしかないんだよな」だつた。

こうして中村監督は、四月以降共同石油の監督を引き受ける事にした。しかし、始めの半年は長崎と東京を何度も往復した。倒産の事後処理である。私たちが出した資本金だけが返つてこないだけならな

んでもないが、他の五人の人たちにも迷惑をかける事になったし、勤めていた会社を辞めてまで来てくれた社員たちの後始末もあるし、コンピュータのリースの契約の処理もあったが、中村監督はそれを一切私には何も言わず自分で処理した。おそらく以後何年もかかっただろうと思う。

ともかく、こうして私たちの大いなる野望はアツという間に第一次オイルショックという怪物に打ち砕かれてしまった。しかし、私はこのオイルショックは神様が私たちを諫めるために起こしてくれたのだと思つて今では感謝している。もしあのまま事業がある程度続いていたとしたら、おそらくもっと莫大な借金を背負つて潰れていたかもしれないからである。

払った代償は大きかった。授業だとすればあまりに高過ぎる授業料だった。しかし私はこの半年で他の教師が得る事の出来ない貴重なものを得た。教師になつて八年間、一応全国の頂点まで登りつめてひとかどの事をやったように思つていたが、会社を設立しようとして業界の人々と交わつていろいろやるうちに、自分の視野の狭さに気がついたのである。

教師社会というのは自分の愚かさに気がつきにくい社会である。大学を出たばかりの青二才が、学校の先生になると「先生、先生」と言つて一人前扱いされる。まだ半人前もないのにこのように扱われるのが自分に気づくのを遅くしてしまうのである。ともあれこうして痛い目に会つた私は、自分がいかにちっぽけなものがわかり、ようやく目が覚めてまた教師としての道を歩く事になった。

福田中学校

ところが、教師にとどまつたのはよいがバスケットの指導は思つようにいかなかった。八年間勤めた桜馬場中学校を出て、初めて転勤を命ぜられたところは福田中学校だった。今の福田中学校は福田本町という場所に移転しているが、当時は小江小浦という場所にあつて福田地区と手熊地区の生徒たちが通つていた。どちらの地区の生徒も山を一つ越えて来なければならぬ場所にあつた。

転勤が決まつた後、私は自家用車で下見に行った。ヘアピンカーブを何度も曲つて下り切つたところに小さな集落があつた。そこが小江小浦だった。右がすぐ海、左が切り立つた崖になっている道を少し進むと広い場所があつてそこに木造平屋建ての長屋みたいな建物があつた。門柱に何か書いてあつたが、古びていて文字がよく読めない。「学校だったんだろうけど、もう廃校になつたんだな」そう思つて自分で勝手にイメージを描いた学校らしき建物を捜してその前を通り過ぎた。しかし、行けども行けども学校らしき建物はない。「もしかしたら」そう思つて戻つてみたらやはりそこが福田中学校だった。

これから授業を教えなければならぬその生徒たちにとっては気の毒だったが、「こんなところに何年いなければならぬんだろ」と私は思った。体育館を捜した。しかしそれはなかった。グラウンドから引き続き海になっていた。遠浅のようで、その砂浜とグラウンドを区別するために松の木が植えてあつたが、その松の木がなくなつたら砂浜とグラウンドの区別は出来ない。燃えつき症候群から抜けだし私はまたバスケットをやるうと思つていたが、それは出来そうもない環境だった。

いよいよそこへ勤める事になつて保健の授業をしていたある日、ガサゴソと音がするので何だろうと思つて見てみると、黒板の溝をカニが散歩していた。教室の板壁からは隙間から空が見えた。雨の日は雨漏りのしない特別教室に移動して授業をしなければならぬ学級もあつた。

二年目の夏、台風が長崎に上陸した。目の前が海だから被害がひどい。翌朝学校に行くとき体育倉庫がふっ飛び、校舎の瓦は剥がされ、その後始末が大変だった。台風が去つて日がさしてくると、台風がたたきつけていった海の汐で学校の前の山は焼けて真っ赤になった。土地の人から聞いた話では、数年前の台風の時学校の菜園で魚がたくさん死んでいたという。海から台風で放り上げられたのである。

そんなところなので、全国だとか九州だとかを狙ったバスケットの指導は到底出来そうもなかったが、授業を教える生徒たちは純朴で親しみやすく、桜馬場中では体験出来なかった触れ合いを体験できた。それは幸せだった。もう一つ、長い目で見れば私にとってとてもよかった事があった。それは、ここに務めている間によく本を読んだ事だった。

桜馬場中時代の私は研究熱心ではあったが生意気だった。特に本を読むのは嫌いだった。活字が嫌いなのではなく、本をたくさん読んで知識や教養を身につけたつもりでいる人間が嫌いだったので、その反動が私に読書を拒絶させた。だから、読む本といえばバスケットの研究のための技術指導書かトレーニングに関する研究物に限られており、文学や思想にはまったく無縁だった。

そんな私が本を読むようになったのは、NHKの大河ドラマ『勝海舟』がきっかけとなった。桜馬場中時代は夜の八時頃家でテレビを見ている事などなかった。しかし、福田中に転勤になってからは夕方暗くなってから砂浜でバスケットをやるわけにはいかず、したがって家に帰るのが早くなる。そして、積極的に見るつもりではなかったが、毎日の夕食時に私の目に飛び込んで来たのがこのドラマだったのである。

「フーン、こいつは面白そうなヤツだな」と私は海舟に興味を持った。それでさっそく書店に行って子母沢寛の『勝海舟』を買ってきた。私はこの、子母沢寛の『勝海舟』を読んで初めて勝海舟がどんな事をしたのかを知った。それまでの私の海舟に関する知識は、「感臨丸に乗ってアメリカに行ってきたサムライ」ぐらいのものだった。

私は子母沢寛の『勝海舟』を読んでいて、「世の中にはなかなか偉い人がいるもんだなあ」と思ったし、その中で言っている海舟のことばの一つ一つが私の心を揺さぶった。何よりも気に入ったのは海舟が新政府側の人間ではなく、幕府側の人間でありながら幕府崩壊に貢献し、日本の歴史をつくり変えた事だった。

普通、英雄豪傑というのは新しい勢力の方から生まれる。海舟が関わった明治維新にすれば、伊藤博文や西郷隆盛などの新政府側の人間である。もしNHKの大河ドラマがそちら側の人間を描いたものだったら私もここまでのめりこんではいなかっただろう。徳川方の重役でありながら、徳川の事ではなく遠く日本の将来を睨んでいた海舟に私はひどく感銘を受けたのである。「私は生意気だった。こんな人物がいたのを知らないで、自分は実践主義者だと気取っていたんだから、思い上がりもいところだ。これは一つ、歴史上の人物をもう一度調べてみなければならぬ」そう思ったのが、私が読書狂いとなった発端だった。

歴史上の人物といっても、江戸時代以前のものはやめた。史実があいまいで作家の脚色が強過ぎるからだ。私が読んだ本は実録に近いものばかりだった。海舟に興味を抱いたのでまず明治維新に関する本はほとんど読んだ。

特に、海舟に関するものは歴史小説ばかりではなく、実際に海舟が書き残した海軍歴史や徳川の経済の事を記録した吹塵録ふいじんろくそれに海舟日記なども取り寄せた。それから太平洋戦争に関する事も多くの実録ものを入手した。戦いに関する出来事ばかりでなく、実業界の人物の事もいろいろ調べた。

そんなわけで、読書にふけた福田中学校の二年間に私は多くの偉大な人物を知り、自分の未熟さを知った。何よりも大きな収穫は謙虚になったという事だった。私は二年間の読書づけの生活で、自分よりも他人の事を先に考えようとする習慣が身についていた。相手が偉い人物だからではなく、相手が選手であったとしてもそれぞれに人格がありそれぞれに考えがある。だから、相手が年下だからというので頭ごなしに叱りつけるのではなく、「まてよ」と、相手の立場に立って考えてみようとするようになっていったのである。

福田中学校で自分のチームを思う存分指導する事が出来ない私は、国体の少年男子チームのコーチをしたり少年女子チームのコーチをしたり、いろんな立場でコーチとしての場はつないでいた。その指導も、やる事は時折自分本位だったりしばしば暴力も出たりしたが、頭の中は確実に変わりつつあった。

教育委員会

福田中学校での二年目の終わりの三月のある日、私は校長室に呼ばれた。

「山崎君、先程教育委員会から連絡があつてね、四月から君は教育委員会だよ」

「委員会つて、本庁のですか？」

「そつ」

私はあわてた。指導主事になると行政の仕事しかなくなるからバスケットのコーチは出来なくなる。

私はさつそく川崎先生に電話をかけた。

「先生、ご存知なんでしょう。私が教育委員会に行く事」

「うん、知ってる」

「そうなるとバスケットのコーチは出来なくなるじゃないですか。白紙撤回にしてくださいよ」

「そんな事言つたつて君、もうすべての配属が決まつてるんだから」

「それが無理なら市民会館でもいいです。あそこなら少しはバスケットに関われますから」

「うーん、そつか。わかつた」

三月末に内示があつた。私が川崎先生に頼んだ事が聞き入れられたのかどうかはわからないが、私は市民会館勤務の指導主事を命ぜられた。そこでの主な仕事はスポーツ教室の指導だつた。壮年の部の健康教室、家庭婦人の部のバドミントン教室やバレーボール教室、小学校低学年の部の少年少女体操教室、幼稚園児の運動遊びを主体にした教室のチビッコ広場などである。

私は市民会館のスポーツ教室の指導で自分の本当の指導力を知らされた。スポーツ教室では、こちらの指導の仕方がまずかつたりおもしろくない内容だつたりするとすぐさま受講者の態度に出るのである。中学校に勤めていたころは生徒がノロノロしていたり授業中におしゃべりしていたりすると、「こらー」の一言で済んだ。ところがスポーツ教室ではそつはいかないのである。スポーツ教室は自発的にやつたきた人たちが対象だから、「こらー」「こらー」で「リッ」とさせるわけにはいかない。

チビッコ広場の指導の時はほんとに真つ青になつた。前夜から指導案を練り上げ、準備万端のつもりでチビッコたちの前に立つたが、指導案の最初の集合整列が出来ないのである。集合とか整列というのは「集まれ」とか「整列」と号令をかければ出来るものだと思つていたが、体育館に集つたチビッコたちはそこにセッティングされている遊具に興味があつてこちらの指示などまったく聞こえない。それぞれが思い思いに遊んでいるのである。そんな時、中学校では「こらー」で整列が出来た。ところが、ここではチビッコたちの前にある遊具よりも興味をそるような事を私がしなければ私の回りにチビッコたちは集まつてくれないのである。

中学の生徒に対して使つていた「こらー」は、生徒たちにとっては「殴られるからこわい」という意味があつたし、「成績を悪くつけられたら困る」という思いにつながつていた。保護者にとつてみれば「子どもが不利になつたら困るから余計なことと言わないでおこつ」というプレッシャーになつてしまつていたのである。

要するに、中学校の教師時代はこわもて一本槍で済ませてきていたのである。もちろんバスケットの指導とて同じ事だ。本当の指導力とはそんなものではないという事を、社会体育という立場でそれまで

と違った階層の受講者を指導する事によって私は初めて知らされた。これも以後の私のコーチとしての貴重な財産になった。

一〇 鶴 嶋(二年目以降)

決断

教育委員会勤めは最初からいやでいやでたまらなかった。私は、当時鶴嶋高校の校長だった川崎先生に頼んだ。

「先生、来年になっても現場に戻れないようなら鶴嶋に採用してくださいよ」

「バカな事を言うんじゃないよ」

川崎先生は私の申し出を本気で考えてはくれなかった。私が川崎先生に言った「鶴嶋に」というのは半分本気だったが「現場に」というのは全部本気だった。だが、指導主事を一年しかやらずに現場に復帰した例は今までにない。私の場合も例外ではなく、それはまったく実現不可能な望みでしかなかった。

公立の中学校や高校に復帰するのが難しいのなら公立の教員をやめて私立に移籍するしかない。年度末が近づいたころ、私は川崎先生をはじめ身近な人々に相談し、鶴嶋に移籍する事を本気で説得して回った。しかし、妻を筆頭にして誰からも私に好意的な返事は返ってこなかった。誰もが、公立の学校の教員としての身分の安定の事、指導主事という将来の管理職コースに現在いる事、高年齢になってコーチが出来なくなった時の事などを理由に反対した。

だが、私にとっては将来の出世の事よりも身分の安定の事よりも、バスケットボールが出来なくて悔がらなくなっている自分がいやでいやでたまらなかった。だから私は、川崎先生に何度も何度も食いが下がった。その甲斐があって川崎先生は遂に折れた。昭和五二年四月一日、私は鶴嶋女子高校の教諭として採用される事になったのである。もちろん、すんなりとはいかなかった。家庭の中でも気まずい空気がしばらくわだかまっていた。しかし、たとえ教師としての出世はなくなったとしても、毎日うつろな目をして生きている自分自身を想像するとしても指導主事という仕事を続けていく気にはなれなかったのである。

私が鶴嶋に身を移すにあたって妻を説得したことばは、「会社を設立しようとした時は冒険だった。あれは、もし失敗したら家族を路頭に迷わすという危険性があった。しかし、今回の事は退職金を損するかもしれないけれど家族を路頭に迷わす危険性はない。校長になるのが教師という職業の最高峰なら、私はバスケットのコーチの最高峰である全国優勝を目指す。その両者のどこに違いがある？」だった。

失敗したら定年を普通の体育教師で迎えるだけで、それ以外の事は何も無い。だから、家族に対しても私を育ててくれた親や先輩に対しても決して裏切りにはならないという信念で私は行動した。

連勝ストップ

私は、鶴嶋に採用してもらうにあたり、密かにその時の中学の大部たちに声をかけ、リクルート活動をしていた。だから、私の移籍と同時に当時長崎の大部である熊谷(長崎 西浦上中)と川井(島原 第二中)の二人が入学した。全国のトップレベルを狙うには充分の素材だった。ところが、私がベンチに座った最初の試合は鶴嶋の歴史に汚点を残す試合となってしまった。赴任して二週間後に行なわれた県下春季選手権大会の決勝で活水高校に負けてしまったのである。

昭和三九年から五一年まで、鶴鳴は県下の公式戦では無敗記録が続いていた。しかも、この春季選手権の二ヶ月前に沖縄で行なわれた九州高校春季選手権では優勝した鶴鳴である。だから、県大会で負けたシヨックは大きかった。負けた原因は私にはわかっていた。監督交替劇の精神的な動揺が選手たちの心にまだ残っていたのである。

私と鶴鳴の選手たちの関係は、中村監督の時代も中島監督の時代も、自分たちの監督と同等に扱われるくらいの仲だった。鶴鳴高校ではバスケットの選手たちだけでなく、他の部活動の先生はもちろん一般の先生にも顔見知りが多く、鶴鳴の若い先生たちには「昔はここに木造校舎があつてね…」などと、部外者の私が昔話を聞かせてやれるくらい鶴鳴にはよく足を運んだ。

しかし、いくら仲良しであっても部外者は部外者だ。実際に採用されるとなれば、鶴鳴の職員にとってもバスケット部員にとっても、「部外者が乗り込んでくる」という気持になる事には変わりはない。選手たちの中には特に、私を知り過ぎていたために、そのころまだ暴力が絶えなかった私に対して「ついて行けるだろうか」という不安が渦巻いていたとしても不思議ではない。

単に、コーチの専門的知識の深さや技術指導の巧拙でチームの強弱が決まるのなら問題を解決するのは簡単だ。それはコーチが専門的な勉強をすればいいのだから。しかし、チーム創りとはそんな簡単なものではない。コーチの技術指導がうまくても、専門的知識が深くても、コーチや選手自身に他の心配事があればそれが微妙に作用してチーム全体の集中力がなくなってしまふのである。春季選手権の決勝戦が終わった後、真っ青な顔をして何が起こったのかもわからないほど動揺している選手たちを集めて私は言った。

「俺にまかせろ。俺は鶴鳴を強くするために来たんだから」

バスケットの魅力にとりつかれ、周囲の大反対を押し切って選んだ道であったが、鶴鳴での第一歩は私にとって希望の第一歩ではなく苦難の第一歩となった。

母

私たちは満州からの引揚者である。父は満州鉄道に勤めていた。だから、満州にいた時は経済的には不自由していなかった。しかし、引き揚げに際してお金は一人千円以上持って帰ってはいけなないと政府から言われていたのでほとんど無一文に近い帰国だった。私たちは昭和二年の六月上旬に奉天（現瀋陽）を汽車で発ち、何日もかかって葫蘆島の港に着いた。汽車は屋根のない貨車で、しかもぎゅうぎゅう詰めだった。そこから船で日本海を渡って京都の舞鶴に上陸した。船は貨物船で、やはり汽車の旅と同様鈴なり状態だった。舞鶴上陸は昭和二年七月一日だった。

私の兄弟は四人だった。全部男の子だった。引き揚げの年、私は四才だった。兄が九才で、私の下には一才半になる弟と生まれて半年の弟がいた。二人の弟は相次いで死んだ。一才半の弟は引き上げる直前の二月にアンギーナとかなんとかいう喉の病気で死に、下の弟は舞鶴に上陸した翌日に死んだ。下の弟は母の乳が出なくなっただのが原因で死んだ。財産をなくして食うものもなく、母がまともな食事をとれないので乳が出ない。それで母は、奉天から葫蘆島までの汽車移動の途中、汽車が止まる度に群がり寄って来て何かを売りつけようとする中国人から虎の子の千円を使ってミルクを買った。それでは足りずに缶詰の汁なども飲ませた。それが良くなかったらしい。

上陸したその日、私たち引き揚げ者の健康状態を把握するために巡回していた看護婦さんが、母に抱かれている弟を見て「あらー、これは大変！早く診療所へ連れて行きなさい！」と、母に言った。長い旅の途中、我が子がそれほど弱っている事に母親が気づく余裕すらないほど当時の状況は悲惨だったの

である。弟の死因は重症消化不良症だった。

引き揚げてきた後は、佐賀県の住吉村（現山内町）に母方の遠い親戚がいたのでそこに身を寄せた。戦争に負けた日本はみんな貧乏で、他人の世話をしてやる余裕がある家など一軒もなかった時代だから、父や母はずいぶん肩身の狭い思いをしたよつだった。

ともかく、私たちを飢えさせないために父は働かなければならない。エンジニアの父はまったく畑遣いの仕事を始めた。近くの農家から野菜を仕入れ、佐世保市の市場まで売りに行った。私たちは父が野菜を売って稼ぐわずかばかりの日銭で暮し始めた。それだけではもちろん足りない。母は若い頃に習った洋裁の技術を生かして、引き揚げに際して持ち帰って来た純毛の毛布を解いて毛糸にし、それでセーターを編んで農家の人にお米と交換してもらったりした。

稼ぐお金はわずかであっても父が仕事をしようになったので居候生活をするわけにはいかない。私たちはある農家の納屋を借りて住むようになった。そこは昔二フトリ小屋だったのを改造したものだった。

なんとかこうして生きていく手立てが見つかったのも束の間、父が死んだ。昭和二三年一〇月、引き揚げて来てから二年目だった。父は肺炎を患って二週間ばかり寝ていた。それも峠を越え、あとは回復を待つばかりであった。その日の朝、私は母に言われて父を起こそうとした。「おとうさん、ごはんだよ」そう言って父をゆすつたが首がぐらっとして変だった。私はこども心に異常を感じて台所で食事の支度をしている母に告げた。「おとうさん、変だよ」

母は食事の支度を中断して土間から上がってきた。父をゆすつた。耳を顔に近づけて息をしているかどうか伺った。そして、「死んでるーっ」と言って泣きだした。私は死というものを認識できる年齢ではあったが、不思議に涙は出なかった。その時の父の顔ではなく、母が父にとりすがって泣いている姿だけが今でもくっきりと映像に残っている。父の死因は、死亡診断書によれば「肺結核」だった。

その日の明け方五時頃、母は父が起きてトイレに行ったのを覚えていたという。それから約二時間後に私が起こそうとした時に父は死んでいたのである。私は父の死因は今でいう急性心不全だったと思っている。

それからの母は、洋裁の手内職で私と兄を養っていかねばならなくなった。住吉村は農業が中心の小さな村だったので、母の仕事も父の稼ぎの手助けぐらいにはなっても家族を養っていけるほどの仕事にはならない。そこで私たちは、同じ佐賀県の北方という炭坑の町へ引っ越す事になった。母は親戚の紹介で、炭坑が経営している縫製工場に勤める事になった。

北方には母の祖母がいた。しかし、その祖母の家にお世話になるのではなく、別に家を借りて住んだ。そこも住吉村の家と同じように、農家の納屋を改造した家だった。家賃は安かったが、近くを流れている六角川が氾濫して毎年洪水に見舞われた。戸棚やタンスや机などの家具は、みんなどこからか買ってきたリンゴ箱をそのまま使っていた。母は「買って毎年洪水でやられるから無駄になるのよ」と言っていたが、実はお金がないから買えないのだった。

縫製工場の給料は安かった。その給料では私たちを食べさせる事が出来ない。母は毎日残業をして帰る。それでも足りない。帰ってから夜遅くまで洋裁の内職をしていた。そのころの母の口癖は「死んでしまいたい」だった。手内職をしながらぶつぶつ独り言を言う。その独り言の中にこのセリフがつい混じるのである。私たちに對してグチを言うのではない。独り言の中でついフツと洩らしてしまふのである。だから本音なのだ。

こども心にもその気持はわかる。だから、母のそんな独り言が耳に入っても聞こえないふりをして、たし、その事には絶対触れなかった。その独り言が心の片隅から薄らいでいくまで私たちも母の辛さを

じっと耐えているしかなかった。

兄は秀才だった。父の血を受け継いで特に理数系の学問には強く、さらに英語も得意だった。その兄は、引き揚げに際して無一文になった事とその後すぐ父が死んだために学問追及の道を閉ざされ、中学卒業後長崎の三菱造船技術学校に行く事になった。そこは、学業優秀な生徒しか入れない難しい学校だったが授業料も何も要らないかわりに三菱造船所が優秀な技術者を養成するために設置した学校だったので、文部省で認可された高校を卒業するのと違い、「ここを卒業しても高卒の学歴はつかないのだった。兄が長崎の三菱造船所に勤める事になったので私たちは長崎に移り住んだ。しかし貧乏に変わりはない。親子三人で六畳一間の市営住宅を借りて住んだ。やがて兄は結婚してそこを出た。その後私は結婚するまでの十三年間母と二人でそこに住んだ。長崎に来てからも母は、洋裁の技術で私を高校と大学に行かせてくれた。この、私だけが高校と大学に行かせてもらったという事だけではどうしても兄に対する負い目として私の心の奥底に今でもずっと残ったままになっている。

私が結婚してそこを出た後母は一人でその市営住宅に住んでいた。「死んでしまいたい」が口癖だった母は二人の息子を無我夢中で育てあげ、ようやくのんびり一人暮しが出来るようになったのである。が、母がホツとする暇もないうちに私はまたやかいな事を母に頼んだ。

チームを強くするためには優秀な選手を獲得しなければならない。優秀な選手を獲得しようとする長崎市周辺だけでは限度がある。県内はおるか、遠く県外からも連れて来なければならぬ。するとその選手たちを預かる家が必要。今では学園に立派な寮があるからその心配はないが、当時は監督の私が一切の世話をしなければならなかったのである。

私は卒業生の富川のおじいさんが貸家を数軒持っていたので、交渉してその内の一軒を安くで貸してもらった事にした。しかし家だけではどうにもならない。食事の世話をしてくれる人がいなければ選手を預かってもらうにもならないのである。しばらくの間は知人に頼んで賄いをやってもらったがそれも長続きがしない。労力の割りには充分の謝礼をしてあげられないので無理もない。

そこで背に腹はかえられずに頼んだのが母だったのである。虫のいい話だが謝礼は無報酬だった。預かる選手からは寮費として二万円もらっていたが、それで食費は賄えたとしても光熱費その他がばかにならないのである。とても母への報酬は出せなかった。

母はその時六〇才だった。長崎に移り住んでからずっと市内のデパートの洋裁部に勤めていたが、「そう、純男がやるといふのなら、デパート辞めようかね」

そう言って、長年私たちを育てるために勤めてきた会社を辞め、安い家賃で住めた市営住宅を出て選手と一緒に住み込んで寮母をしてくれる事になった。寮母を引き受けるにあたって母は一言付け加えた。「引き受けるから必ずもう一回全国優勝してちょうだいよ」

遅刻

私は日常生活がだらしない選手は大嫌いである。毎年毎年同じ事の繰り返しだが、新入生のしつけをするには時間がかかる。昭和五二年の初夏、こんな事があった。熊谷の学級担任が朝のホームルームから戻ってきて、「熊谷は今日休んでますね。どこか具合でも悪いんですか？」という。私はすぐに熊谷の自宅へ電話をした。その日たまたま非番で休んでいた父親が電話に出た。「繁子は学校に行きましたけどね」と、父親はげんそうに答えた。何時頃に家を出たのか尋ねると、「少し寝坊していつものバスには間に合わなかったので次のバスに乗ったんですが」と父親は言った。

そのバスだと学校に着くのは八時半を過ぎる。遅刻だ。私は事情が飲み込めた。遅刻をするとか、掃

除当番をさぼるとか、日常生活でだらしない事するのは絶対に私が許さないという事を熊谷は知っている。私の顔を見るのが怖くて学校の門をくぐれず、どこかでオロオロしている熊谷の顔が手に取るように私にはわかった。

私はもう一度熊谷の家へ電話をかけ、きつとどこかでうろつろしているはずだから、もし所在がわかったらまた連絡してくれるように父親に頼んだ。すると昼過ぎに再び父親から電話がかかってきた。「先生、すみません。おっしゃる通りでした。繁子は物置き小屋にいました。半日そこで泣き通していたらしくてですね。」と、平謝りだ。おそろく、電話口で何度も何度も頭を下げているに違いない。

電話を切った後の私は、もう熊谷を責める気持にはならなかった。寝坊した事がそれほど重大な事であるとわかるようになれば、もう口やかましく言う必要はない。その後の熊谷は幼稚さがなくなり、日常のしつけに手間のかかる選手ではなくなった。

ブルとサム

私と鶴鳴を語る場合、私が鶴鳴に移籍するに先立って積極的に勧誘した熊谷繁子と川井芳子抜きには語れない。熊谷繁子は長崎市内の西浦上中学校出身で、身長一七五センチのセンターだ。川井芳子は島原市の第二中学校出身で、やはり一七二センチのセンターである。

熊谷にはサムとニックネームをつけた。それは旧約聖書の中に登場する怪力の神様サムソンからとった。川井にはブルとつけた。ブルは英語で雄牛だ。川井は精神的に逞しく粘り強い選手だったのでピッタリだと思った。他の選手を粗末にしたわけではないが、この二人には特別の思い入れがあり、ニックネームをつけるのも念入りに考えた。

特別の思い入れがあったのは、この二人にすばらしい素質があったからだ。私はこの二人を軸にして再び全国のトップレベルを狙おうと思っていた。この二人が新入生で入ってきた時の三年生の主力はキャプテンの下田、小さいが足の速い山口、二年生の主力には福岡からやってきた双子の波多江姉妹がいた。いずれも先代の中島監督と一緒にリクルートに駆け回って取ってきた選手たちだった。だから、移籍したといってもみんな長所も欠点も知り尽くしている選手たちばかりだった。その中にこの二人をうまく溶け込ませて全国制覇に向けての仕事をさっそく開始しようと思っていたのである。

前述のごとく、チーム創りは最初の段階でつまづいたが六月の高校総体ではもう立ち直り、すんなりインターハイ出場のキップを手に入れた。私は、この二人が一年生であるうが何であるうが、四〇分間コートでプレイするチームにならなければ鶴鳴の全国優勝狙いは有り得ないと思ったので、この二人を突貫工事で改良した。

川井はそのセンスを買い、ガードに転向させた。熊谷はセンター以外のポジションは考えられなかったが、点が取れるようにするためにリバウンドボールの取り方と取った後腕を下げないでシュートを打つ事だけを徹底して教え込んだ。腕を下げると周りの選手にボールをたたき落とされてしまつのである。

八月下旬に福岡で行なわれた国体九州地区予選では、三年生の下田、二年生の波多江姉妹、一年生の川井と熊谷のスタメンで圧勝して国体の出場権を得た。決勝戦での熊谷の得点は三八点だった。ボールを持った腕を下げないようにしただけで、しかもほぼ三週間の間に熊谷はこれほどの得点力を身につけたのである。

本国体は青森県の八戸だった。一回戦の相手は北海道代表である。私たちは千葉県の柏市にある共石の合宿所に立ち寄って合宿してから八戸に入った。八戸に発つ日、中村監督から饞別をもらった。熨袋に「北海道にだけは負けるな」と書いてあった。「小沢先生にもやってよ」と言って、北海道チームの

監督である札幌静修高校の小沢先生に渡す餞別も預かった。その熨袋には、「長崎にだけは負けるな」と書いてあった。私たちは大の仲良しだった。八戸に着くとすぐ北海道チームの宿舎に行き、お互いの熨袋を見せ合って笑った。

一回戦の北海道チームとの試合は天覧試合だった。天皇陛下が観戦しておられた前半の数分間は二人とも静かなものだった。ところが、「天皇陛下がご退席になられます」という放送があつて、みなでお見送りした後はがらりと変わった。私も小沢先生も、ベンチから立ち上がって怒鳴りつ放しのいつものスタイルになってしまった。

八戸の国体でベストエイトに漕ぎ着けてなんとか落ち着いた鶴鳴は、冬の関東遠征で力をつけた。二月の中旬に全国選抜大会の九州予選がある。その頃全国選抜大会は三月下旬に行なわれていた。鶴鳴の将来に希望が見えはじめてきたので、この九州予選にはすべてを一新するつもりでまずユニフォームを新調して乗り込んだ。それまで赤に白抜きで大きなKの字を入れていたのを、ブルーの地に鶴鳴の鶴を舞わせたユニフォームにした。

九州大会では鶴鳴が少々力不足の時でも負けた事はあまりなかったので、優勝するつもりで大会に臨んだ。しかし、宮崎の小林高校に負けて二位だった。九州大会では二位だったが、私はこのチームの力と将来性がこの大会ではつきり見えたので、三月下旬の選抜大会までにもう一度チームをしつかり創り直した。

創り直すにあたって考えた事の一つは、キャプテンの波多江姉(二年生、一六〇センチ)をイントガード、波多江妹(二年生、一五八センチ)をフォワード、一年生の川井(一七四センチ)をセカンドガード、熊谷(一七七センチ)をセンター、そして一年生の戸上(一七七センチ)をフォワードセンターに起用するという、それぞれのポジションを明確にする事だった。

もう一つは、チームオフENSEを組み立てる上での基本方針だった。それは、波多江姉を中心にして川井と熊谷のコンビプレイで得点を取るパターンは約束プレイとしてしつかり作り、波多江妹と戸上はフリーで動かすという方針で行く事にした。理由は、波多江妹が半月板損傷でリハビリ期間中だったのでチーム練習に入れるのはしばらく無理だったという事と、波多江妹と戸上の二人はその性格上細々とした約束でしつかりつけない方がよいと判断したからだった。

三月の選抜大会のヤマは準々決勝の夙川学院戦だった。夙川学院には、主将の金高をはじめガード陣もセンター陣もメンバーが揃っており、大阪の樟蔭東や東京の明星学園と並んで優勝候補の一角と噂されているチームだった。

試合は常に夙川学院に主導権を取られて苦しい試合だった。後半、私は窮余の一策でトライアングルツイーを敷いた。これが当たり、夙川学院の攻撃のリズムが崩れ、わずかの差で勝利をものにした。私も選手たちもこの夙川戦の勝利ではつきりと優勝を意識した。準決勝の相手は東京代表の明星学園であった。ここには野口というすごい選手がいる。ちなみに、ベスト四に残ったチームには、優勝候補筆頭の樟蔭東には橋詰というビッグセンターが、小林には竹山というすごいフォワードが、鶴鳴には川井と熊谷の大物がそれぞれいた。高校バスケット界は豊作の年だった。

明星学園には辛うじて勝った。いよいよ念願の決勝戦進出だ。ところが、私の予想に反して向こうは樟蔭東を破った小林が上がって来た。九州大会で鶴鳴は小林に負けた。だから小林はかなり力をつけてきている事は私にもわかっていて。しかし小林は、かつて全国大会のベスト四以上には進出した事が一度もない。小林の相手は全国優勝の経験がある樟蔭東だ。だから樟蔭東が小林の挑戦を退け、決勝には樟蔭東が進出してくると思っていたのである。それを破ってきた小林には相当の勢いがついていた。

九州代表同志の対戦になった決勝戦は終盤までもつれ込んだが、最後に鶴鳴が突き放されて負けた。

しかし、素質はあったがキャリア不足だった川井と、同じく素質はあったが甘えん坊の熊谷はこの大会で成長し、本物になった。さあ、これでいよいよインターハイの優勝狙いだ。私はそう思ったが、なかなかそう簡単に強くはならなかった。

最初の誤算は双子の波多江姉妹だった。妹の真奈美は選抜大会の二ヶ月前の練習試合で膝を捻り、二月の九州大会を休んで三月の全国選抜大会には出場したものの精彩がなく、スピードが戻らないまま選手生活を終わった。彼女は結局、卒業後に手術をした。前十字靭帯が切れていたらしい。当時はまだ私も勉強不足で彼女の治療を保存的療法だけで済ませ、経過観察も何もしないままだった。姉のゆかりは、選抜大会準決勝の明星戦で膝を捻った。これは、妹ほどひどくはなかったがやはりその後のプレイにずっと尾を引いた。

第二の誤算は人間管理の問題だった。個人個人のしつけに加えてチーム内の人間関係の事でやっかいな問題が持ち上がり、その処置に私は苦慮した。私にはまだ、そのような問題を右から左にサツと処理できる力はなかった。

そんな問題をずるずる引きずったままインターハイに臨んだ。開催地の山形はフェーン現象のために気象台始まって以来の記録が出るほどの暑さだった。暑さでみんな参ってしまったている中、沖縄の辺土名高校がノーシードであれよあれよという間にベスト四まで勝ち進み話題をさらった。同じ九州のチームだが、鶴鳴はベスト八で明星学園に選抜大会の敵打ちをされ、大差で破れた。決して暑さのせいではなかった。

試合に負けた後、宿舎のご主人が慰めるために選手たちを蔵王に案内してくれたが、その誠意が気の毒になるくらい選手たちは不愛想だった。負けたからではなく、選手たちの心の中にもチーム内の人間関係のもつれから生じた暗いものがわだかまっていたのである。人間関係のもつれ等、多少のもめごとはこのチームにもある事だが、当時の鶴鳴はある選手の扱いの事で非常に悩んでいた。それは、少々の話し合いや相談では解決出来そうにないほどやかいなものだった。

さらに不幸は襲ってきた。インターハイの後の夏休み強化練習で川井が腰を捻ったのである。相手のシュートをブロックしようとしてジャンプした時だった。川井の腰部捻挫はなかなか痛みがとれず、九月に入って入院しなければならなくなった。だから川井は、一〇月に長野の篠ノ井で行なわれた国体には出場しなかった。試合は一回戦で愛媛に負けた。川井の治療は、結局冬休みまでかかった。

腰をやったのは川井だけではなかった。川井が腰を痛めて二ヶ月後に今度は熊谷もやってしまった。でも、熊谷の腰は言ったと言っても中学時代からわかっていた腰椎分離症がまた痛み出したのであって、川井のように捻ったとか打ったというケガではなかった。しかし、熊谷の腰痛も頑固な痛みがなかなか抜けず、川井同様入院して治療する事になった。これも冬休みまでかかった。

熊谷はこの腰痛だけで残りの高校生活はケガなしで過ごせた。しかし川井は不運な選手だった。腰がよくなったと思う間もなくまたケガをした。今度は手首の骨折だった。三月の下旬、全国選抜大会を目前にした練習試合での出来事だった。選抜大会は川井が出場できないのなら試合にならない。私はテーピングして川井を出場させた。しかし、片手でしかボールを扱えない川井が活躍出来るわけがない。川井に多くを期待するのは酷だった。川井の得点は二点だった。試合は東京成徳に一回戦で負けた。

川井と熊谷は二人揃って好調の状態で試合をした事がない。そして、残る全国大会はインターハイが大津、国体が延岡と、二つになってしまった。この二つの大会で高校のバスケット生活が終わるのである。なんとしてもいい試合をして卒業させたかった。

しかし、川井はどこまで不運な選手なのか、六月に今度は左肩を脱臼した。インターハイまで二ヶ月あったので何とか試合には出られるまでに回復したがやはりプレイの切れは悪い。インターハイでは因

縁の対決で明星学園に勝ってベスト八に進出したものの、次の試合では甲子園学院に負けてベスト八止まり。一〇月の国体は長野に勝ってベスト八に残ったけれども準々決勝では東京に負けてこれもベスト八止まりで終わった。

川井と熊谷の事ばかりを書いてしまったが、もちろんこの二人だけで試合が出来るものではない。他の選手たちもそれぞれに頑張ってくれた。しかしこの二人が中学の時から、この選手たちを軸にして全国制覇を果たしたいと思っていたし、この二人には日の丸を胸につける選手になって欲しいと思っていたので、最初の選抜大会で二位になったつきり、尻切れトンボに終わってしまったのが残念でならなかった。

しかし、それから十数年経った今、当時人間関係のごたごたで振り回されたのもケガの続出に悩まされたのも、決して運が悪かったのではなく、その引き金になった要因が私にあったという事がようやくわかるようになった。当時の私には気負いと焦りがあった。「指導主事を辞めてまでこの道を選んだのだ。結果を出さなければ笑い者になる」という私の気持ちが選手の焦りを誘発し、「このチームは全国優勝を狙える。川井と熊谷をなんとか早く育てなければ……」という思いが他の選手の妬みを生みだし、それらが連鎖反応的に次々と作用して事件や事故を起こしたのである。

この三年間のできごとは、チーム創りはコーチが選手をぐいぐい引っ張っていくだけではできないものだし、またそれは、特定の選手のためだけにやるものではなくて、コーチと選手達との協同作業でチームとしての成果を挙げようと思って進めていくものだという教訓を私に与えたはずである。だが私自身、このような結果になった事は単に運が悪かったとしか感じていなかった。気付くのに十数年もかかってしまった。尻切れトンボに終わってしまった事も残念だが、気付くのにこんなに時間がかかってしまったのもまた残念である。

十一 入院

血尿

昭和五四年十一月四日。突然血尿が出た。それはまるで、トイレに醤油をぶちまけたような小便だった。血尿だという事はすぐわかったが、身体的にはまったく異常を感じなかったし、そこに至るまでに思い当るような事はなかった。「これがあのへモグロビン尿症というやつかなあ」と思った。以前医学書を読んだ時に書いてあったのを思い出したのである。だから、気にはなったが一晩寝れば良くないかもしれないかと思つて翌日まで様子を見る事にした。

翌朝トイレに行くと、尿の色はまったく薄れていない。醤油色のままであった。私はすぐ、大病院の朝長氏に電話をした。朝長氏は、私が桜馬場中学にいたころ中村の貧血の治療でお世話になった医師である。事情を聞いた朝長氏は、受け付けを通さずに直接医局へ来るようにと言った。私はその指示に従つて直ちに原研内科の医局に行った。朝長氏は私の尿を遠心分離器にかけて調べていた。私の尿には一〇cc中一ccの割合で血液が混じっていた。

「すごい出血だね。タンパクも++(ツープラス)か……」と言いながらしばらく考えていた朝長氏は「とにかくまずは絶対安静だね」と言った。「きのう、県民体育大会の試合でかなり激しく動き、衝突したり転倒したりしたけど、それが原因じゃないかね」と私は尋ねた。「一つのきっかけにはなるかも知れないが、人の内蔵はそれほど簡単に傷つくものじゃないよ。高い所から転落したとか、交通事故に遭ったとかいふのならそんな事も考えられるけどね」と朝長氏は答えた。さらに私は尋ねた。

「食事は…？」

「今のところ腎炎の症状じゃないから食事は普通でいいよ。アルコール…君は飲まなかったね」

私はとりあえず家に帰され三日間の安静を命じられた。朝長氏はその間に泌尿器科に正式な手続きをしてくれて十一月八日から私は入院となった。

検査

正式に入院させられると泌尿器科としての詳しい検査がある。最初に行なわれたのが腎盂造影という検査だった。これは、特殊な液を静脈から注射して、その液が腎臓から尿管を通り膀胱に溜まるまでの過程を数回に分けてX線撮影する検査である。この検査では、腎臓から膀胱に至るまでの間に結石がないかとか、腎臓が変形していないかなどという事を調べる。ガンや腫瘍があればその部分が変形したり肥大したりしているし、腎機能が低下していれば腎臓が萎縮している事がある。

造影の結果、それらはすべて異常なしという結果が出た。私はホッとひと安心した。しかし、次に待っていたのが大変な検査だった。それは、膀胱鏡と尿管カテーテルという検査だった。膀胱鏡は、尿道からステンレス製の管を通して膀胱の内部を直接見る検査だ。この検査はとにかく痛くて苦しい。この検査の結果、左の腎臓から出ている尿管から血液が膀胱内に流れ込んでいる事がわかった。

それがわかると今度は尿管カテーテルだ。この検査は膀胱鏡の管の中にさらに細い管を入れ、それを腎臓の内部まで差し込む検査である。この細い管の先端からスタスタと落ちてくる尿は腎臓で生成されたばかりの尿で、途中で尿管も膀胱も通らないで直接外部に出てくる。この尿の中に血液が混じっているという事は、膀胱からの出血でも尿管からの出血でもなく、腎臓本体のどこからか出血しているという事になる。

病気の診断というのは犯罪捜査のようなものだ。疑わしいものを列举し、消去法で一つ一つ消していくのである。私の病気もこれでトントン拍子に解決するものと思っていたらここで暗礁に乗りあげた。それ以上の事がさっぱりわからないのである。下された結論は、「安静と止血剤投与でしばらく様子をみましょう」だった。

絶対安静

安静の程度は症状に応じたランクがある。私のそれは絶対安静だった。排便の時だけベッドを離れる事が許され、それ以外の時はすべてベッドの上である。しかも、ベッドの上で上半身を起こす事も許されない。寝たきりなのである。だから、私の部屋は自室にトイレのついた特別室だった。

血尿自体は珍しいものではない。検査によって潜血反応が見られるものから肉眼でも識別できる血尿までさまざまだ。しかし、私の腎出血は量が多すぎた。尿器に採る私の尿はいつも真っ赤だった。入院して初めて知ったが、人間が一日に排出する尿の量は約二五〇〇ccだそうである。もし私の腎出血が最初に朝長氏に診てもらった時のように尿中の一〇パーセントが血液だとしたら、単純計算すると一日に約一五〇ccの出血量だという事になる。こんなに毎日出血していると貧血にならないのだろうかとか心配になった。

私は、医師が止血剤を投与して安静にさせているだけで何もしてくれないようにしか感じなかった。なので、こうして安静にしている以外に方法はないのかと何度も聞いた。答えは「今のところこれしか方法はありません」だった。

話は少し戻るが、私が入院させられたのは聖フランシスコ病院だった。絶対安静が必要だが大学病院のベッドは満員で空きが一つもない。そこで、ベッドの空いている聖フランシスコ病院に預けられ、定期診断は車椅子に乗せられたまま大病院の泌尿器科まで出かけるという変則入院だった。

聖フランシスコ病院での私の主治医は武藤医師だった。朝長氏の仲間と同じ血液専門の医師だった。その武藤医師が私に説明をしてくれた。出血の量が多いのと、出血の原因がはっきりとわからないのでとにかく出血を止める事を最優先に考えて処置しているという事だった。病名は『特発性腎出血』だった。

理由の説明には納得した。だから医師の指示どおり私は治療に専念した。一週過ぎ、二週過ぎ、三週目が過ぎてても状態は何等変わらなかった。私はいらいらした。ある日、武藤医師が回診に来た時に私に言った。

「山崎さん、看護婦があなたの部屋には行きたくないって言ってるよ」

「私はわがママを言った覚えはありませんよ」

「いや、わがママをして困るっていうんじゃないよ。あなたの顔が怖くて話かけにくいんだってさ」

私は無言でことばを返さなかった。「しんぼう、しんぼう」そう言って武藤医師は次の部屋に行った。

今のところこれしか方法はないという事もわかる。医師団が私のカルテを見て、あれこれと思いめぐらしている事もわかる。しかし、窓から見える景色といえば遠くの花々の頂がほんの少し見えるだけであとは空しか見えない病室で、一ヶ月近くも寝たきりでいると気が狂いそうになるのだった。

小 康

十二月中旬。入院五週目に入って出血が止まった。あまりに出血が止まらないので毎日の点滴液の中に副腎皮質ホルモンを投与したのだそうである。出血が止まって三日目、武藤医師が言った。

「よさそうだね。少しベッドを起こしてみようか」

安静のレベルが少し下げられ、ベッドの背を昼間だけ約三〇度ほど起こしてよい事になった。それまで山と空しか見えなかった景色に街の家並が加わる。街の景色がこんなに美しいと思っただけでなかった。しかし、街の景色に見とれるのは始めだけで、私の心は退院後のチームの建て直しに飛んでしまった。そうかと思えば「そうだ、今までお世話になった方々に年賀状も書かなきゃ」と、私の思考はあちこちに飛び、もう退院した気分になっていた。

しかし、それも夕方までの束の間喜びでしかなかった。夕食後の私の尿は再び酱油色に染っていた。私が身を起したのは約三〇度だから、腎臓に圧迫が加わったといってもわずかなものだ。その程度で再び出血するほど私の症状はデリケートだったのである。「退院をするのはまだまだ先だ。ましてや、普通の生活に戻り、今までと同じようにバスケットが出来るようになるなど、気が遠くなるほど先の事だ」私は酱油色の自分の尿を見ながらそう思った。

翌朝、回診でもないのに武藤医師が病室に入ってきて言った。

「また出たそうだね。しばらくまた元の状態に戻しましょう」

そう言われなくても、再出血の時から私はそうしている。「そんなわかりきった事を言われなくてもわかってる。今は誰とも話したくないんだ」口には出して言わなくても、そう思っているとわかったのだらう、武藤医師は「しんぼうですよ。しんぼう」そう言って笑顔を作った。

病気の回復は、人間の持つ自然治癒力に頼るのがもっとも効果的で、投薬や外科的治療はを手助けするにすぎない。それは何度も説明されてわかっている。しかし、いつ止まるかわからない出血を、ただ安静と投薬だけでひたすら待つ事に耐えられなくなってきた。「よし、手術して左の腎臓を取ってもらおう」私は一人で勝手にそんな結論を出した。

出血しているのは左の腎臓だけである。右の腎臓は正常だ。腎臓は一つだけで機能する。だから、左の腎臓を取っても大丈夫のはずだ。と、自分勝手に解釈したのである。そしてこの事を武藤医師に告げた。すると、武藤医師がその事を朝長氏に伝えたのだろう。翌日の夕方朝長氏が私を見舞ってくれ、そして言った。

「左腎を切りとつてくれって言ったそうだね」

「……」

黙っている私に朝長氏はゆっくり噛んで含めるように説明をし始めた。

「そりゃ、君が言うとおり、切り取れば出血は止まるだろうし、生きていくには腎臓は一つでも差し支えはないさ。しかし、医師というのはいろいろなケースを考えるんだよ。」

一つの例を言おう。君の場合、今は原因がはっきりつかめないが、もし先天的に君の血管や血液に何か病気があって、その症状が今たまたま左腎に出ているとしたどうする？ ね、もしそうだとしたら左腎を切り取った後で右腎にその先天的な病気が出る可能性が充分にある。そしてそれが現実の事になったら、あとは人工透析しかないよ。」

とにかく、君を原因不明の患者として放置しているような事は決していない。毎日君の経過を観察し、血液や尿を調べ、対策を立てているんだよ。ただ、医学の分野は未知のものがまだ多くてね。あとで原因がわかった時は、『なんだ、こんな簡単な事だったのか』と思うんだが、それを見つけるまでがなかなか大変なんだ」

私の腎出血が先天性のものであれ何であれ私には問題ではなかった。バスケットが出来ないのが死ぬほど辛かった。朝長氏の説明はよくわかったが、私の心の中には、「たとえ右の腎臓に症状が出てもかまわない。左腎の出血さえ止まればまたバスケットが出来る。そのためなら寿命が半分に縮まってもかまわない」という思いしかなかった。

しかし、朝長氏がわざわざ見舞ってくれて、心から私の事を思ってそう言ってくれているのにそんなわがままを言う勇氣はなかった。

実況中継

そうしているうちに二ヶ月が過ぎた。そして一月中旬、全国選抜大会の県予選が行なわれた。毎年この大会はNHK長崎放送局が実況放送してくれる。私はこの試合を病室のベッドの中で見た。私が入院中とはいえ、まだまだ県下の大会で負けるようなチームではない。私の代役のコーチは三年生の川井と熊谷のコンビである。この二人は選手として優れているだけでなく指導力もある。私の代役をやらせるには申し分ない二人である。私は、この二人の采配ぶりを楽しみにしてチャンネルを回した。

しかし、試合開始三分も経たないうちに「この試合は負ける」と私は思った。選手の表情が死んでいてまるで夢遊病者のようなのである。試合は私の予想通り開始早々から純心のペース、川井と熊谷の両代役コーチもあれこれ手を尽くして試合の流れを変えようとするが、コートの中の選手たちは笛吹けど踊らずだ。最後までその状態は変わらず、試合は完敗だった。

それまでに三回ほど新人戦や春季戦で負けた事があるが、それはいずれも九州大会や全国大会につながる試合ではなかった。それが、遂に全国大会につながる大切な試合で負けてしまったのである。

テレビの画面にはインタビューを受ける純心高校の舟越監督がアップで映し出される。その後が監督の胸上げだ。悲願達成の喜びを精一杯味わっている純心高校を見るのは辛かった。しかし、私はテレビの電源を切らずに最後まで見た。悔しい思いをしながら敢えて最後まで見たのは、退院して再びバスケットが出来るようになった時のためにこの光景をまぶたの裏に焼きつけておこうと思ったからである。その悔しさが再起のためのエネルギーになるような気がした。

試合後、川井と熊谷が揃って病室を訪ねて来た。二人とも真つ青だった。二ヶ月前に島原で行なわれた新人戦では、私が入院中であつたにもかかわらずやはり川井と熊谷の代役コーチで優勝しているだけに、今回の敗戦がショックだったのだろう。私は二人の労を労い、卒業の日までチームの面倒を見てくれるよう頼み、具体的な指示をして帰した。この二人に辛い思いをさせたのはかわいそうであつたが、不思議に感傷的にはならなかった。

選手募集

毎年十一月から二月頃までが選手募集にもっとも大切な時期である。ところが、病室に釘づけの私はまったく募集活動が出来ない。この間、私の替りにあちこち走り回ってくれたのが部長の前田先生だった。前田先生は鶴鳴の初代監督で、中村監督にバトンタッチをしてからは現役を退いていた。

「鶴鳴の山崎はガンでもうダメらしい」というような流言が飛び交っている中での募集活動である。なかなか思うようにいかない。前田先生は焦った。しかし世の中、棄てる神あれば助ける神ありである。そんな状況の中で救いの神が現われた。島原半島の南端にある布津中学校の志岐先生である。

志岐先生は私の大学の大学の大先輩で、野球が専門だが赴任地の中学の部活動でバスケット部の顧問をやらされて以来、バスケットが面白くてやみつきになってしまった先生である。数年前に中村監督と二人で講習会をした時に知り合いになった。それからのつきあいである。志岐先生は囲碁が強かった。県チャンピオンになり、全国のアマ名人戦に出場した事もある腕前だ。私に会うといつも、「碁は何目置かせても勝つが、バスケットは私が置かなきゃならないもん」と言って豪快に笑った。

その志岐先生が前田先生と一緒に病室を訪れた。そして言った。「山さん、もしうまくこれからしばらくのうちに退院出来たとしても、今年一年の活動は無理だろうと思う。でもな、来年と再来年の二年間あれば充分だ。あんたの事だから何とかチームを創るだろう。本人たちもその気であるし、うちから二人預けるよ。焦らず、養生してもう一度復活してよ。…な」こうして志岐先生の教え子の本多と山崎の二人が鶴鳴に来てくれる事になった。もう一人、市内の丸尾中学校からも浜崎が来てくれる事になっていたので都合三人だ。

後で聞いた話だが、志岐先生と前田先生は何度も武藤医師に会い、悪性の病気ではないのか、バスケットは出来るようになるのか等々、いろんな事を聞いて確かめたのだそうである。医師が大丈夫だと言っても現に今入院をしている私に期待をかけるというのは大冒険である。確かめたとはいえ、もし間違えばその二人は高校生活を棒に振る事にもなりかねない。それなのに志岐先生は私の回復を信じ、そして回復後の二年間に教え子の将来を託してくれたのである。私は必ずや再起する事を誓わずにはいられなかった。

退院

出血は二月中旬になってようやく止まった。しかし、前回小康を得た時に失敗したので主治医もなかなか安静を一気に解いてはくれない。まず上体を起こすだけで様子を見て、状態が良ければベッド上で身を起こす事が許されるといふように慎重に少しずつ安静度が解かれていった。私も慎重だった。二度とこんな思いをしたくないから、身を起こすのも許された時間より早く切り上げてベッドに横になった。

トイレの許可が出てあらためて気がついた事だが、足の裏の皮がポロポロむけ、バスケットダコでこつこつしていた私の足の裏は薄皮一枚で覆われた赤ん坊の足の裏のように柔らかくなっていた。私は自分の足の裏をさすりながら「使わなければこんなに退化してしまうのか。俺の指導力もこんなに退化してしまっていないければいいけどなあ」と思った。退院が迫って来ている事を感じながらも、再びコートに立って何から手をつけていいのかわからずにポーツとしている自分を想像して不安でもあった。

二月末にテストのために一日だけの外泊許可が出た。退院は、少しずつ段階を追って負荷をかけながら検査をし、異常がなければ次の段階へと進み、日常生活に戻しても差し支えないと判断されてから決定するという手続きを踏むのだそうである。外泊はその最終段階のテストなのである。そのほかにも病院の周りを散歩したり、芝生の上でストレッチングをやったりしたがもう血尿は出なかった。待望の退院は三月六日だった。入院以来四ヶ月と二日。ほんとうに長かった。気が狂いそうだった。

長く苦しい入院生活だったが、私はこの入院の間に二つの貴重な体験をした。そのうちの一つは健康である事の大切さをいやというほど味わった事だった。私の場合、原因ははっきりしていないが過労が一つの原因であろうと武藤医師は言う。「体力には自信がある」「俺の若い頃は血の小便が出るほど自分を鍛えたものだよ」と、勝手に自慢して威張って見せても、健康を害してしまっただけは何にもならないのである。

二つめは、世の中には何もしないでただひたすら待たなければならぬ事があるのだという事を知った事である。何をやるにもせっかちで、自分の思うような結果が出なかったらすぐ怒っていた私は、じつと辛抱する事を覚えた。入院した時は信長であった私が、退院した時は家康に変身出来たような気がした。

合宿

退院後の春休み、三月二十二日から三十一日までの一〇日間、さっそく合宿をした。場所は島原半島の布津という町である。布津中学校は前述の志岐先生の学校である。この町で合宿をする事にしたのは、今度布津中学校から来てくれる事になった本多と山崎の保護者や学校の先生たちに挨拶をするという意味が一つにはあった。もう一つの狙いは、再起をゼロから出発するという意味で十五年前のやり方に戻してみようという事だった。

十五年前の合宿は、今のように簡単に県外に出かけて行く事が出来て、実業団の合宿所に泊めてもらって、食事もその食堂で食べさせてもらって、というようなお膳立てが揃った合宿は出来なかった。合宿といえはまず県内で、宿舎はその土地の公民館か何かを借り、食事は買い出しから調理まですべて自分たちの手でやるというような合宿ばかりだったのである。今回はそんな合宿に戻してみようというわけだ。

布津合宿の宿舎はその円通寺というお寺の本堂を借りてそこに寝泊りする事にした。食事はマネー

ジャーとケガをして練習に参加出来ない選手を中心にすべて自分たちの手で準備させる事にした。御飯の水かげんを失敗し、芯の残った御飯を何度も食べさせられた。準備に手間どり、ほとんど毎日といていいほど住職の奥様の手をわずらわせた。だが、どんなにまずい食事を食べさせられようと、どんなに手間がかかろうと、選手たちの心に「自分たちの手で再び鶴鳴を築き上げていくんだ」という意識が芽生えてくれる事を願った。

練習は一日一〇時間やった。朝起きたらすぐロードワーク、これに一時間かかる。そして、午前中四時間午後五時間の練習をする。昼休みはわずか二〇分ぐらいしかない。用意されたおにぎりを押し込むのが精一杯だ。それでも始めは一人の落伍者もなく順調に進んだ。選手にもそれぞれ再起にかける気負いがあつたのだろう。しかし、日を追う毎に昼食が喉を通らない選手が増えてきた。そして、合宿五日目に事故が起きた。三年生の山口美由紀が膝を捻挫したのである。山口はすぐ長崎に帰し、医師の診察を受けさせた。七日目には二年生の平井貴子が全身衰弱でしびれ感と運動マヒを訴え、深夜に病院に担ぎ込む事になった。

この合宿では、選手の構成上でもさまざまな変化が起きた。知的理解力はチーム随一だったが精神面でムラがあつた鳥沢が空位のままの副キャプテンの座を占めた。入学当初からこまねずみのように動きが速く、下級生の頃からリードマンとして活躍してきた金本が、アキレス腱断裂後のリハビリから解放されて復帰した山口満子にスタメンの座を奪われた。わずか一〇日の間にさまざまな変化が起きた合宿であつたが、私はこの合宿を通して一人ひとりの選手から再起にかける息吹きを感じた。

再発

新年度の最初の学校行事は新入生の歓迎遠足である。私も救護車に乗って稲佐山の頂上まで登った。頂上は寒かった。この遠足はいつも春の日ざしを浴びてポカポカと暖かく、生徒と遊んでいても汗ばむくらいなのにこの日は寒くて生徒と遊ぶ気にもなれない。が、そう感じたのは私だけだった。異常なのはその日の天候ではなく、私の体調の方だったのである。その日の夕方、再び血尿が出た。

学校に戻っても「寒い、寒い」の連発だったが練習はいつも通りにやった。そして、練習の後トイレに行った時に私はまたあの醬油色の尿を見たのである。その醬油色の尿を見た時、私はほとんど失神せんばかりで、目の前が真っ暗になった。

それからまた私は、自宅療養、検査、入院という日々が続くようになった。しかし今度は朝長氏には内諸にしておいた。退院直後から合宿をやり、無理を重ねた事が原因だとはっきりわかっていたのでさすがに朝長氏に相談する勇氣は出なかつたのである。一人でこっそり泌尿器科へ出かけて診察を受けた。

六月の中旬に佐世保で行なわれた高校総体、さらにそれから二週間後に宮崎で行なわれた九州大会は最低の体調で臨んだ。私を使用した宿舍のトイレは毎回血の海となった。ただ、一つの救いは、前回同様出血はひどかつたがその他の症状、例えば血圧とかタンパクは正常だった事であつた。ガンや腫瘍も検査の結果見つからなかつたので治療はもっぱら出血を止める事に焦点が絞られた。

九州大会終了後、私は最後の入院をさせられた。最終段階の検査と治療を施すためである。最終段階の検査とは血管造影検査の事である。この検査は、病院側でもできるだけやらないようにしているという。あまりに苦しい検査だから途中で実施不可能になる事が多いのだそうだ。この検査は大腿のつけ根のリンパ節に近いところを少しだけメスで切開し、そこを通っている動脈の中に細い管を通してそれを奥深くまで進入させ、腎臓の入口まで到達したところで造影剤を一気に注入する検査である。

注入された造影剤は動脈から入って腎臓内に張り巡らされている細い血管を通って腎静脈から出てく

る。その造影剤の流れをストロボ撮影するのである。そうすると腎臓内部の細い血管がすみずみまでくつきり映し出される。で、もし出血があればその部分がぼやけたように映し出されるから出血部位がわかるのである。

医師に予告された通りそれは非常に苦しい検査だった。造影剤を注入されたたん、体内の血管という血管すべてに熱湯を注ぎ込まれたように身体中がカーッと熱くなり、次の瞬間猛烈な吐き気に襲われる。その検査をベッドにしばらくつけられたまま延々三時間繰り返し繰り返し行なわれるのである。気の弱い人や老人にはとても無理な検査だ。

検査の結果左の腎臓の出血部位がはっきりとわかった。それからの治療は強引に出血部位を封鎖する方針がとられた。それは尿道から管を通し、直接腎臓内へ硝酸銀を注入するという治療方法である。注入された硝酸銀の膜が出血部位を覆い、封じ込めてしまうのだそうだ。この治療もまた苦しい。治療のたびに痛みで腸がよじれてしまいそうである。それを二ヶ月の間に五―六回やった。何回やっても止まってはまた出血、止まってはまた出血の繰り返しでなかなか止まらないので七月に入ってから注入は通常の倍の量と倍の濃さにした。それが効いたのか、出血はピタッと止まった。

だが、極端な運動制限と安静は続く。インターハイも国体予選も、現地へ到着したらすぐ宿舍で横になる有様だった。二学期になり、新チームの練習がスタートしても、私は体育館にソファアを持出し、深々と座ってただじっと練習を見守っているだけだった。

選手は一生懸命だ。私が思うように動けないからその分を補おうとして頑張る。だが、何をどうすればいいのがわからないから気持だけが空回りしてプレイには一向に迫力が出てこない。日を追う毎に危機感が増し、まるでマネキン人形のように表情がなくなっていく選手たちを見ながら何もしてやれない自分自身がはがゆかった。

どん底

退院直後は、私が入院前に指導していた貯金がチームに残っていたから勝てた。しかし、生き残りの選手たちが去った後、私の指導を受けていない選手たちが中心になって戦わなければならないチームになるともうダメだった。秋の新人戦では三回戦でノーシードの大村高校に危うく負けそうになり、ベスト八にかじりつくのがやっとだった。これを皮切りに、一月の選抜大会二次予選、四月の春季選手権、六月の高校総体とすべて負けた。全国大会はあるか、県内の大会でさえも一度も優勝できずに昭和五六年度のシーズンを終わった。

キャプテンは五島からやってきた松下だった。それに長崎山里中出身の双子の平井姉妹と同じ中学出身の百本、みんな「バスケットをするなら鶴鳴で」と、憧れて入ってきた連中である。誰もがこうなる事を予想だにしなかったはずだ。

なんといっても気の毒だったのは原田五月だった。彼女は前年の夏、国体選手に選ばれたのをきっかけに、バスケットに青春を賭けようと思って鶴鳴に転校してきた。高校では、転校すると六ヶ月間は公式戦に出場出来ない。それを承知で転校した結果がこれだ。運命のいたずらと言ってしまうとそれでおしまいが、そんなセリフで片付けてしまうにはあまりにもむごい結果であった。

価千金

昭和五七年度は、前田先生と志岐先生のおかげで私が入院中に獲得した選手たちが三年生になる年度

である。二人への恩返しのために是が非でも勝たなければならない。ところが、夏休み前から心臓がおかしくなった。時々キューツツとしてめつけられるように痛む。ひどい時は立っていられなくて座り込むほどだ。私は二学期になって大病院の第三内科(循環器専門)を訪れた。ここには桜馬場中学時代のまぼろしの名チームの主将であった萬木のお兄さんが医師として勤めている。彼に診察を頼んだ。

調べてもらった結果、心臓の異常はなかった。たぶん、腎臓を痛めて以来極端な運動制限が続いたためのストレスが原因なのだろうと言われた。「先生、もういいですよ。普通に運動してみませんか。負荷をかけて異常が出ないんですから、運動して大丈夫ですよ」彼はそう言っただけで私を励ましてくれた。

私はこのことを非常に心強く思った。天にも昇る気持ちで彼の説明を聞いた。そして、それからの練習に再起を賭けた。もう座ってばかりいなくてもいい。しかし、立って指導するのは疲れる。そこで私は体力の回復を図るためにランニングを始めた。

昨年はずべての大会で負け、そして今年も負けが続いている。はっきり言って優勝を狙えるような駒はそろっていない。私は六月の高総体で当たる純心高校だけに的を絞る、特殊なオフェンスとディフェンスを練習する事にした。そうでもしなければ絶対勝てそうもなかったから。

ディフェンスはトライアングル・ツーを要所で使う事にした。ガードとフォワードに巧い選手がいたのだ。それを封じなければ勝てない。オフェンスは二年生の大神を第一エースにし、三年生の浜崎を第二エースにして動きを作った。練習には時間をかけたがなかなか思うようにはいかなかった。十一月の県下新人戦、一月の選抜大会二次予選、四月の春季選手権はともに惨敗である。

もちろん、トライアングル・ツーは六月までとっておくつもりだから使わない。だから、ディフェンスがうまくいかないのは差し引いてもいい。しかし、オフェンスがうまくいかないのである。点が取れなければいくらディフェンスで工夫しても勝てはしない。名案が浮かばなくて私は何度か挫折しかけた。しかし、五月に入ってから少しずつ望みが出てきた。浜崎と大神の息が合うようになり、まわりの選手も点を取るパターンがわかり始めてきたのである。きっかけをつかむと若いだけに早い。五月のひと月だけで見違えるように強くなった。強くなったと言っても駒が駒だから、優勝を狙うとかどうとか言うレベルではもちろんない。ただ、純心高校が射程距離内に入ったというだけの事である。しかし、まったく手が届かなかったところからここまで来たのだから、選手の顔つきも違ってくる。

だが、神様は無情だ。五月の最終週になって大神のシュートを狂わせてしまった。まったく入らない。シュートが入らなくなった大神は、練習が終わっても残ってシュート練習をする。私も残ってボール拾いをする。二人とも無言だ。大神はシュートの勘を取り戻す事以外には何も見えない。私は大神のシュートが入るようになる事を祈りながらひたすらボール拾いをする。しかし大神のシュートは回復しない。回復しないまま、高校総体があと一週間後に迫った。

このままだと勝つ見込みはまったくない。そこで私は、ちょっととした手術を試みることにした。その手術とは、高校総体一週間前の土曜と日曜の二日間、中学の男子チームと練習試合をする事だった。狙いは、男子相手に思い切り乱暴な試合をさせる事により、意識過剰の抑圧された状態を脱出させる事にあった。これは大成功だった。二日目、大神の目からうろこが落ちたようにシュートが入った。試合が終わった時は、憑物が落ちたようにみんな晴ればれとした表情だった。

さて高校総体だ。大神のシュートが入るようになる他の選手まで伸び伸びとプレイするようになり、決勝の純心戦は出来過ぎと思われるくらいうまくいった。純心は外角陣とセンター陣が分断され、攻撃のリズムが悪い。一方鶴鳴は一人ひとりが伸び伸びと自分のプレイをする。その差が常に七点ぐらいのまま終盤を迎えた。こうなると、会場の観客も「ひょっとしたら鶴鳴が勝つかもしいない」という思いで試合を見る。しかし、そんな緊張感が漂う中でリードマンの本多が五反則退場となった。土壇場の勝

負所である。私は本多の替りに出す選手を捜そうとしてベンチに目をやった。その時、一年生の平尾とパツタリ目があった。しかも平尾は半分腰を浮かしている。私はほとんど本能的に言った。

「よし、トツポ、おまえだ」

平尾は一年生だ。この四月に入学したばかりでまだ二ヶ月にしかない。確かに、九州中学大会で優勝した山里中から入ってきた西上・馬場・平尾のトリオは一年生だが戦力になる。現に、馬場はスタメンで出場していた。しかし平尾は、山里中時代にはスタメンではなく六番目の選手だったのである。だから、鶴鳴に来て西上や馬場は試合に出した事があるが平尾は出した事がない。

しかし私は、昨年九州中学大会の決勝戦で交替要員として出てきた平尾が、きわどいシユートを決めて山里中のピンチを救ったのが脳裏をよぎった。腰を浮かした平尾も平尾だが私も私だ、そんな大事な場面で他の上級生をさしおいてそれまでずっとベンチにいた平尾を指名したのだから。しかし、それは結果的に成功だった。一年生の西上と平尾が純心の必死のプレスをかくぐってボールをキープし、浜崎や大神につないで点差を縮められないまま試合終了となったのである。

試合終了のピストルが鳴ったとたん、鶴鳴の選手たちは抱き合って泣いた。私のとなりに座っていた前田先生が「やったね」と言っていて私の手を強く握りしめた。前田先生も声を詰らせ、涙を浮かべていた。この選手たちは、私が入院している間に前田先生が走り回って募集してきた選手たちである。苦労が報われた前田先生の胸中は察するに余りある。

私は前田先生の手をしっかりと握り返し、「先生、ほんとうにありがとうございました」と言った。県内の大会では勝つのが当たり前で、勝つても何の感激すら湧かなかった鶴鳴の選手たちが、今こうして抱き合って泣いている。しかし、どん底まで落ちた後のタイトル奪還だ。タイトルの中ではもっとも小さなタイトルだけれども、抱きあって泣く選手たちの胸中も私にはわかる。私は、三年生一人ひとりの手を握って言った。

「ようやく報われたね。この優勝は全国優勝にも優る価値があるよ」

価二千金

頼りなげな選手たちばかりであったが翌年も引き続き高校総体だけは優勝した。そして私は、学期毎に発刊される学校新聞の監督談話で次のように述べた。

「昨年の優勝を、私は価二千金と言って誉め讃えた。今年の優勝は、もし価二千金ということばがあるなら、そう言って誉めてやりたい」

昨年優勝した時、「鶴鳴復活ですね」といって身近な人たちは私を励ましてくれたが、実は昨年よりも今年の方が何倍も苦しかった。強敵はもちろん純心高校である。しかも純心の主力選手はほとんど残っているのである。一方こちらは、大神以外は下級生ばかりだ。チームらしくなるまでには時間がかかる。しかし私は、昨年勝った勢いを利用して選手には暗示をかけながらチーム創りに励んだ。

十一月。新チームになっての最初の公式戦である県新人戦が行なわれた。この大会に臨む前、私はいやな予感がしていた。決勝で当たるだろうと思われる純心高校に負けるのはまだ力不足だから仕方がない。しかし、私にはそれ以前に負けるかもしれないという不安があった。プレイが思うように身につかないからとか、体力的に不安要素があるかという理由ではなく、チームの雰囲気自体に何かひっかかるものがあったからである。そしてそれは見事に的中した。決勝で純心と当たる前に準決勝で長崎西に負けてしまったのである。

それだけでも十分にダメージを受けているのに、さらにそれに追い討ちをかけるように、その二週間

後第二エースとして育てようとしていたセンターの馬場が膝を痛めて入院する事になった。しかも、悪い時には無理を重ねるものだ。敗戦のショックが癒えないうちに馬場の入院。それを取り返すための猛練習。そんな悪循環で選手は身も心も疲れ果て、遂に一年生が練習をポイコットした。そのタネはもちろん私が撒いた。

心配した担任の先生や保護者がいろいろ言ってくる。しかし私は、その度に「私が責任持つてなんとかしますから、しばらくそつとおいてください」と言つて、この件に介入されるのを拒んだ。単なるわがままや私に対する嫌がらせでこんな事をしているわけではない。私が追い込み過ぎたのが原因なのだから、時間をかけて彼女たちにのしかかっている重圧を取り除いてやらなければならない。

私は冬休み明けまでしんぼう強く待った。そして冬休み明け、私は一年生全員を自宅に呼んで話をした。しかし、彼女たちの心の中には不安が色濃く残っていた。さらに私は時間をかけ、ゆっくり彼女たちの心を和らげ、遂に練習に漕ぎ着けた。事件発生後四三日目だった。

私にはしかし、もう一つ重要な仕事が残っていた。それは、一年生の馬場に追い越され、すっかり自信をなくしていた二年生の沢村をもう一度レギュラーとして使えるように育て直す事だった。入院して膝の手術をした馬場を補う選手は沢村しかないのである。一度自信をなくした選手が再び自信を取り戻すのは大変だ。私も氣を使った。沢村を鍛え直すのではなく、彼女の長所だけを活かしてレギュラーに復活させなければならぬ。沢村の弱点はハンドリングの悪さだった。それが暴露しないようにフォーメーションを組み替える。あれこれと手を尽くした結果、三月末の合宿で沢村は完全に甦った。

こうしてチームらしくなってくると、不安でたまらなかつた一年生たちも元氣が出てきた。しかしメンバーは少ない。二年生が大神、梅野、沢村の三人。一年生が西上、平尾、小野の三人。そのほかに、二年生に一人バセティ（父アメリカ人 母日本人）と一年生に一人馬場がいるが、二人とも膝の故障で戦力としては期待できない。だからこの六人だけの戦力で戦わなければならない。しかも、梅野ひとりだけがガードとフォワードの控えて、センター陣の控えは一人もいない。泣いても笑つてもこの六人で戦わなければならないのである。

こうして新学期を迎え、四月に島原で行なわれた新人戦では決勝で純心高校に負けはしたものの、最後まで粘り抜いていい試合が出来た。選手たちには自信がついた。それが日常の練習でも表情にも出ている。それから二ヶ月後の六月、いよいよ高校総体だ。選手たちは「昨年の再現を」とはつきり意識している。それが気負い過ぎや硬さにつながらないようにするのが私の役目である。

高校総体は予想通り純心と鶴鳴の決勝戦となった。純心は昨年の屈辱を晴らすうとして開始早々からムチが入っている。鶴鳴は滑り出してアツという間に一〇点リードされてしまった。だが、私はタイムアウトを取らなかつた。観衆は割れんばかりの歓声、純心ベンチは立ち上がりっ放し、点差はアツという間に一〇点、そんな状況になると普通は誰でも冷静さを欠いてしまう。しかし、この時の鶴鳴の選手たちは誰一人慌てたり浮き足立ったりしていないのである。興奮しているのは外野席だけだ。それを見て私は小細工をするのをやめ、選手にまかせてみる事にしたのである。

そうしてじつと試合の成り行きを見つめていると、開始早々の五分間を除いて純心高校が乱れに乱れ、間もなく鶴鳴が逆転した。その間、何か特別の事をしたわけではない。ただ淡々と試合を進めていただけだ。鶴鳴が逆転したのは純心が勝手にペースを乱したからであった。

試合は鶴鳴がリードしたまま舞台が後半に移った。乱れに乱れていた純心も、そのままずるずるとは引き下がらない。地力があるからやはりじりじりと追い上げてくる。そして、残り五分。鶴鳴は遂にかまえられた。つかまえられたのは、ポイントゲッターの大神が三本連続ロングシュートはずし、それを取られて立て続けに速効を出されたからだ。場面としては最悪だ。

この時、それまで黙って私の横に座っていた前田先生が私の肘をつついて心配そうに「おい…」と言った。私は答えた。「私も心配ですよ。しかしね、大神の顔を見てください。何本落とそうが自信満々で打っている。私は大神のシュートで勝負するチームを創ってきた。あいつがあれだけ自信を持って打っているんです。もう何も言う事はないですよ。それにあいつの事だ、三本続けて落としたら次は三本続けて入れますよ」

試合中に、しかもこんなに緊迫した場面で、これほど落ち着いて他人と話をしながらベンチをしたのは初めてだった。そんなに私が落ち着いていられるほど選手たちは立派だった。

試合は結局、土壇場で大神が決めたシュートが決勝点になり、鶴鳴が勝った。私が予告したような得意のロングシュートではなかった。強引ともいえるドライブインだった。しかし、やっぱり勝負を決めたのは大神だった。選手たちが興奮し、抱き合って喜んだのは試合終了のピストルが鳴った瞬間だけであつた。

『価二千金』こんなことばはないだろうけれども、こんなに緊迫した状況の中でここまで冷静になり、これほどまでに仲間を信じ合えた選手たちに、私はこのことばを送ってやりたいのである。